
俺が事故って起きたら紅の鉄槌少女（ヴィータ）になっていた【ネタ】

恋町小路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺が事故って起きたら紅の鉄槌少女ヴィータになっていた【ネタ】

【Nコード】

N3668Y

【作者名】

恋町小路

【あらすじ】

事故って神様に協力することになって、起きたらようじよになっていた！

自らが魔法少女リリカルなのはの海鳴市の住人であった天道司が紅の鉄槌少女ヴィータになっていた。

原作ヴィータはどうなっているのか？

このお話は植物状態になった主人公が自分の体を取り戻そうと奮起するお話となっています。

元の体に戻るため幻想入りして神様はじめました！（東方無関係）。

基本性能ウィータ+神様レベルアップで強くなっていく予定。
いろいろ突っ込みどころ満載であることを明記しておきます。

0 - 1 事故ったら神様に会った

俺の名は天道司てんどうつかさという。

海鳴市に住むごく普通の大学生である。

大学は二流だが、俺はこの大学に通うために親元を離れ、一人ボロアパートを借りて、大学とバイト先を往復する毎日を送っている。いや、送っていた、と言うのが正しいか。

貧しいながらも充実した大学生活と言えただろう。

四年目に入り、そろそろ就職するか実家に帰って家業を手伝うかの選択を迫られていたが、どっちつかずに曖昧なままにしていた。

去年までの俺ならば、迷わずに実家に帰って、家の手伝いでもしながらのんびりと構えていたことだろう。

だがそうもいかないことになった。

好きな女ができたのだ。

彼女は海鳴の人だった。

実家に帰れば二度と会えないかもしれない

だから俺は就職を目標に企業のパンフなどを集めながら将来性のある就職先を吟味していた。

いくつかの目処はつけたものの、自信等はまったくなかった。

告白はまだしていない。

だが確信はあった。

彼女は俺のことを好いていてくれているのだと。

鳴り響く携帯のメール。

登録したばかりの着信音。

好きな人の曲。

待ち合わせをしている駅前の広場の植え込み。

時間は朝の九時。

大事な話がしたいから、俺は彼女を日曜日にデートに誘った。
彼女がそれをデートと思ってくれれば、それが俺の心を加速させる。

想いを告げる決心になる。

ドキドキしながら携帯のメールを開く。

『ゴメンなさい！ ちょっと遅れそうです。駅にいるから三分発の乗って行きます』

なあんだ、遅刻か、俺はドキドキさせたことをどんな風に言ってるのか、と頭の中でシミュレートするが、俺は女の子と気の利いた話をしたことがないのである。

『了解』

と短くそれだけを返信する。

待った？ いや全然待ってない、なんてありふれた台詞のカードさえ今日は切れそうもない。

まあいいか、と青い空を見上げる。

眩しい日差し、いい天気である。

俺は彼女が出てくるであろう改札口をじっと見る。

電車でここまで一五分、と時計を確認しながら植え込みのレンガに腰掛けて彼女を待つ。

後一四分……一三分……一分。

待ちきれない時間は切なさとなって過ぎていく。

改札口に行こう、と待ちきれなくなって、立ち上がった次の瞬間、世界を悲鳴にも似た叫びが切り裂いていた。

急ブレーキの音が鳴り響き、振り向くと銀色の光を見ていた。
信じられないような衝撃が全身を打って、俺の意識は一瞬にして
刈り取られていた。

「ヘイ、ユー？」

いきなり頭の中に響いた軽い挨拶に、俺は眩暈を覚えて頭を押さ
える。

「ここはどこだ？」

あたり一面が真っ白で、浮遊感による肉体の不安定さにパニック
に陥りそうになる。

落ち着け、なにがあった、なにが起こった？

「もしもし？」

「……あんた、誰だよ、おっさん」

俺に話しかける声だけの存在に、一応、声的にそうであるつとい
う呼びかけをする。

「ふ、わしか、わしはな神様よ」

「帰るわ……」

「ちよ、帰るってどこによ」

俺は思い切りため息をついて見せると、否定を込めて頭を振った。
今どきその手のジョークはないだろう……
こんなふわふわした空間でどう帰るのかなんてわかりもしないの
だが。

「ふう、夢か……」

「いや夢じゃないから、君ね、車に轢かれました。ちなみに植物人間確定」

衝撃的な事実だな。

白けた気分になる。

いくらなんでもそれはないわ。

「今日デートなんで、それはちょっと遠慮します」

「いやいや、確かに君事故ってるからデートはできないし、これ見
てみ」

と神様と名乗った男が言うと、空間に駅前が映し出される。

その一角に悲惨な事故現場が映し出されている。

多くの見物人が取り巻いて、それを眺めながらひそひそと囁きあ
っている。

救急車がやってくるのが見えて、現場を保存する警官数人とパト
ーカーの姿も見えた。

(ひき逃げだつてよ)

(誰だよ、轢かれたの。男?)

(若いのにーちゃんだな、すっげー血だな。こりゃ死んだか)

(ひき逃げした車、見たか?)

(見た見た、白のセダン。プレートも見たのいるかもな)

(そりゃよ、すぐ捕まるな。つまんねえの)

嘘、だろ……轢かれたのってもしかして俺なのか？

「轢かれたのはお前さんじゃよ、天道司」

「う、そ、だ……」

力のない声が口から漏れる。

「本当だしさ、諦めろよ」

「ふざけんなよ」

「おやおや……ありゃ、お前さんの彼女かね？」

その言葉に俺は映像を再び凝視していた。

彼女がいた。

人ごみをかき分け、徐々に前に、事故の跡地に足を踏み入れていた。

血まみれの現場だった。

や……めろ……よせ……俺はここにいるんだ……見るな、見るんじゃない。

伸ばしかけの肩まである彼女の髪が揺れて、その艶やかさはとてもきれいだっただ。

そのアーモンドのくつきりした瞳が揺らいで、警官達と救急車を呆然と見つめていた。

小さく可愛らしい彼女の口元が動いて呟いた。

テンドウ センパイ？

救急車にシートをかぶせられた俺の肉体が運び込まれていく。

タンカーから血痕がアスファルトに落ちて、新たな赤い染みを作り出す。

彼女になんて現実を見せてやがるんだ！

「ヤメロ、ヤメロ、ヤメテクレー!!!」

俺は目を閉じ、耳をふさぎ、ただ叫んでいた。
もう何も見たくなかった。

「事故の被害者の身元判明、海鳴市××在住……天道司、海鳴大学
所属四年つと。まだ若いのにな」

警官が現場を苦い顔をして振り返って帽子のつばを下ろす。
彼女は動かない、いや動けない。
今、私はなにを聞いたのだろう？
嘘、だってさっきメールして……

「先輩……どこ、ですか？ 隠れてるのかな……やだ、先輩、どこ
にいるの？」

ふらふらと歩みだして、警官に押し留められていた。

映像・フェードアウト

「現実と理解したかのう？ 天道司」

「ああ……わかったぜ、クソヤロウ」

振り返ると、頭の中の存在などではなく、神と名乗る、白髪に白
衣の着物姿の老人が立っていた。

「クソヤロウ、かね。神に失礼な男だ。こう見えても海鳴の神なん

「じゃぞ？」

「その神様が事故った俺に何の用だ？」

「早い話がのう、わしもここの神様やるの飽きていてな。少しばかり見込みがありそうなのがこないかと張っておったんよ」

「はいー？」

「神様やらんか？ はじめは見習いじゃがな」

「わけわかんねえよ！」

「お前さん、血筋に神性が混じっておるようだな。海鳴でも滅多にみん気質でな。死に掛けたのを幸い、魂を召喚したのよ。まあ神といてもピンからキリだがよ」

「まだ俺は死んでねえ、神様は他で探しな」

「お前さん、事故のせいで元の身体には戻れん。意識不明のまま朽ちるのを待つつもりか？ このまま放置なら持って数年で命は尽きよう」

「神様の力で戻せないのか？ 海鳴の神様なんだろう」

「ふふん、戻せなくもない」

「本当に！？ 戻せ、今すぐ戻しやがれ！」

俺は神様をとっ捕まえて締め上げていた。

気がつくと俺の身体は宙を舞って放り投げられていた。

叩きつけられると受身を取る姿勢になるが、ポフンっと真っ白な地面に弾んでいた。

「神に乱暴するでない。ご利益がなくなるぞい？ 話を訊く気になつたかの？」

目の前にごつい杖を突きつけられ、俺は肯いていた。

俺は合気道三段だが、まったくなす術もなく投げられるなんて、素人相手には考えられないくらいだ。

肯いたのは初めて沸いた恐れと本能の働きからだった。

「わしにはお前さんを元の身体に返す力はある、あるが、世上の穢れというものが神の力を妨げるのよ」

「穢れって？」

「邪念やよこしまなもの、穢れそのものでできた魔がそれにあたる。それが力を妨げるのだ。邪魔するのはお前さんに溜まり積もった悪しきものの穢れよ。覚えがないかの？ ごく最近、お前さんの身の回りでよからぬことや事故が起きなかつたかの？」

「えっと、何でだ、何でそんなことまで……」

身に覚えがあつた。

それは最近どころではなく、ずっと昔から俺の周りでは不思議なことが起こっていた。

誰にも話したことがないし、話せば気味が悪い子として見られたからだ。

「お前さんの神性がそれらを引きつけるのだ。今のお前さんの肉体は邪念をもつた穢れで雁字搦めになった要石のようだ。わしが介入しなくては早晩にでも弱つたお前さんを取り込んでしまうことだろうよ」

「何でだ、何で神様は俺に構うんだ？」

「みすみす未来ある若者の将来を不意にするのは憚びなくてな。それにお前さんに海鳴の神を押し付けて、わしもそろそろ隠居したいのが本音よ。なんじゃ、嫌そうな顔をするな」

「ねーから、俺はごく真つ当に人間やりてーよ。故郷だつてあるしな」

「まあ、なる気があるうとなかろうと、お前さんが意識を取り戻すには穢れを祓わねばならん。それができるのは神性を持つ者自身の力が必要よ。穢れを祓えば祓うほど力は増していく。それをお前さんにやってもらおうと思っくんじゃ。お前さん自身の手で立って貰わ

ねばならん」

「……なるほどな、等価交換ってやつか。あんたが力を手に入れるために俺に働けと？」

「イグザクトリー、じゃ。お前さんが願う力の形をまとって現界してもらおうことになる」

「はいい？」

「今のお前さんは魂だけ、仮初の身体が必要になる。安心しろ、ベースは人間型になる。持つ力もお前さんに近い力を持ったものになるだろう。わしのここで溜め込んだ情報ソースを元に構成するから問題はない」

「も、問題？ あるだろ、絶対！」

「気にするな、多少の外見の違いはあるが、お前さんの神性に期待しようではないか。新たな因果の種をまいてアマツカミどもを慌てさせてやるわ」

「おっさん、話訊けつてばよ！！ って何か私怨っばい！？」

俺の抗議は一切無視して、神のヤローが俺の額に杖を押し付けていた。

「後で指示はちゃんと出すから心配するな。現界したら海鳴神社まで来るのだぞ。さあ、行け！ 天道司。己が運命を切り開くがいい！」

突如開いたブラックホールのような穴に司が吸い込まれて消えていく。

「ふう……行ったのう。思わぬ拾い物じゃった。事故が起きたのは無印の原作が始まるちょっと前じゃのう。介入するもよし、しなくともよし。なにせよよい暇つぶしじゃ。いったい誰になるのかのう？」

神様は好好爺とした顔つきで笑うのだった。
この神様、リリなのファンであった。

0 - 2 起きたら幼女だった……

薄暗い見慣れた天井だった。

当然だ、ここは俺のアパートの「寮山白」、天井の木目に沿った独特な染みがついている自分の部屋だった。

2Kのそれほど広くもない部屋には俺だけしか知らない収納スペースが多々あったりして、暮らしやすいようにコーディネートされている。

六畳の畳部屋の布団は万年布団で、実に寝慣れた寝心地となっていた。

人が来ると足の踏み場もないのだが、自分だけのルートを知っている俺には何の問題もないわけだが、さすがに女の子を部屋に入れたことはまだない。

その部屋でいつもどおり目覚めたんだが……

妙なことに気がつく。

寝ぼけて目を覚ますとと何かがおかしかった。

素っ裸でいたのだ。

おかげでスースーして、寝返りを打ちながら毛布を引き寄せる。

その小さな手を見て、ようやくなにがおかしいのかに気がついた。その体に触れる。

ほっそりした、なだらかな曲線の肩だった。

つるぺただが男のものではない胸は成長段階をまだ迎えていない。

なんだこれは……

俺は混乱していた。

何が何だかわからない。

直接見るのが怖くて股間に手をやると、やはりついてるべきものがついていなかった。

これは夢か、夢であってくれ、と恐る恐る顔を上げて、その先にある鏡を眺める。

赤い長い髪を持つ幼い少女の顔が見つめ返してくる。

くつきり整った顔立ちに、大きな瞳、どう見ても日本人ではない赤い髪の色。

外見の年齢は小学生の中頃から高学年の間くらいだろうか、司の知識ではその程度の認識ではない。

えーと、幼女が俺の部屋にいて、この幼女が俺、なのか？

鏡を見ると、俺の表情に合わせて、鏡の中の少女も表情を変える。完全に一致した動きだった。

布団を頭からかぶる。

現実逃避に眼を瞑っていた。

そして思い出す。

俺は事故に遭って、神様に会った。

あれは現実で、俺の肉体はどうなったのだろうか？

そもそも今のこの体はいったい誰なのか？

救急車で運ばれた、ということは俺の体は病院にあるはず。

そして植物状態にある。

不味い、非常に不味い。

元の体に戻るには神様に協力しなければ元に戻れないと提示されていた。

そのために手を貸すにしてもこの体で何ができるのか？

思考すると、途端に腹が減ってきた。

今は何時だろうか？

照明をつけるのは不味いと判断して、目覚まし時計を手繰り寄せ

る。

あれから三時間しか経っていないことが時刻から判断できた。

何か着る物は……

押入れを漁るが、この幼女体形に合う服などありそうもない。身長一七五の成人男性の服を着るには身長が足りなさ過ぎた。しかし素っ裸で出歩くのも問題がある。

とりあえず服は後回しにして、冷蔵庫を開いていた。

パンと牛乳しかねえ、とため息をつくが、ないよりは増した。ちっこいぶんだけ小食で済むかも知れねえ。

座り込んで、食パンを齧り牛乳で胃袋に流し込み、ようやく一息をつく。

押入れから短パンとTシャツを取り出して、サイズの差に愕然としながらベルトを締めていた。

ワンサイズどころの騒ぎではない。

短パンのはずが膝下まで突き抜けている。

上着は革ジャンを選ぶ。

季節的にまだ必要だし、外見的なアンバランスさには眼を瞑るしかない。

靴は履けるものがなかった。

ブカブカを通り越してスカスカだがスニーカーを履くことにする。帽子をかぶって最後の仕上げをするが、帽子もぶかぶかで赤い髪が胸元に零れ落ちる。

どうにかまとめられないものかと苦闘するが、まとめ用のゴムさえ使ったことがない俺は背中流して諦めた。

鏡の前に立ち、やはりどうしようもないアンバランスさに笑ってしまっ。

しかし何だ、これで出かけるのか、と一抹の不安がよぎる。

まず、この部屋にいることを大家、及び住人に知られることは不味い。

天道司は今頃病院である。

連絡が行っているだろうが、両親がこっちに来る可能性もある。

鉢合わせすれば面倒なことになるし、今のこの俺の身を明かすものすらない。

そして誰かが訪ねてくる可能性が高いのだ。

植物状態で長期入院ともなれば、この部屋自体が引き払われる可能性もある。

もしそうなければいるところがなくなる。

大学に頼りになる奴もいるが、それは天道司が作り上げた人間関係である。

得体の知れない少女の言い分を真実と信じられる根拠がない。

何よりも植物状態で生きている俺が存在するという時点で信じがたいはずだ。

そこまで考えて、俺は色々と言っている事実につげー深いため息を吐き出していた。

そついや、海鳴神社に来いって言ってたな。

場所どこだっけ？

海鳴市のマップを広げて位置を確認する。

バイクなら近いんだが……

この体のサイズでは乗れるはずもない。

いや、それよりもだ。

俺がどこの病院に入れられたのかを確かめる必要があった。

電話帳を取り出して、病院を確認する。

天道司が入院しているかを聞き出すための台詞をシミュレートし

て、一軒一軒ずつ確認していく。

四件目でヒットした。

海鳴市中央総合病院。

そこに緊急入院していた。

いぶかしむ電話の向こう側を無視して電話を切る。

さて、どちらから先に行こうか……

慎重にドアから表を窺い、誰もいないのを確認して外に出る。

アパートの階段を下りると、駐車場で作業をしている大家さんの後姿が見えて、俺は足早にすぐ後ろを通り過ぎていた。

大家さんは気がついた様子もなく車をいじっていた。

アパートの出入り口に置いてある、自分のバイクを見てきちんとカバーがかかっているのを確認し、一安心してそのまま敷地を出た。何せ購入してまだ半年の司が大事にしているバイクだった。

今月はツーリングに行く予定だったが、その約束は果たせそうになかった。

そして駅に向かう。

どのみちどちらに行くにしても駅を素通りすることはできなかった。

それにどうしても確認したいことがあった。

異様に体が軽い。

実際に体も縮んで背も低く体重も軽い、という意味ではなく、基礎的な身体能力が向上しているのが理解できた。

体の重さを感じさせないバランスの取れた肉体である。

とはいっても、今の俺にはだからどうした、程度のことであり、深く考えている余裕などなかった。

歩きながら手持ちの金のなさを認識して不安に駆られる。

キャッシュ・カードは司自身が財布に入れていて、引き落とすにはそれが必要だったからだ。

さしあたっては部屋に残してある、バイトで貯めたへそくりがあるものの、ツーリング用に貯めていた金であったので少し気が引けていたが、金がなければ何もできないとそれを持ち出していた。

客観的に見れば窃盗である。

しかし今はそんなことにこだわってはいられない。

今の俺の頭の中を占めるのは、あの事故の現場、俺が轢かれた駅前広場のことだった。

事故に遭う瞬間のことは、あの悲鳴にも似た急ブレーキの音があっても頭の中に思い出すことができた。

轢かれた後の記憶は、あの神様と会う時間のものしか残っていなかった。

だからどうしても疑ってしまうのだ。

本当に俺は車に轢かれて生死の縁をさ迷っているのだろうか？ 確認するのも怖いが、何もしないでいるのはもっと怖かった。

自分の知らないところで自分が死んでしまう。

もしそうだったら、今の自分はいたい何者なのだろうか？

自然、足取りは速くなる。

駅が見えてくる。

駅前広場に入ると、植え込みのレンガの壁が一部崩壊した現場に

到着していた。

すでに野次馬や警官達の姿はなく、現場保存のために残された黄色いテープが張られているのみだった。

ガードレールも一部変形し、どす黒く変色した血がこびりついている。

ここで俺は……轢かれたのか……

アスファルトに残された血痕の跡、一際血の海であったそこは赤黒く染まったままだった。

俺の血が流れて、ずたぼろになった俺がそこに横たわっていたのだ。

気分が悪かった。

不意に寒気を感じて、体を抱きすくめ座り込んでいた。

気持ちが悪い。

誰が俺を轢いたのだ？

胸の内に芽生えた何かがドロドロと糸を引いて、それに飲み込まれそうだった。

しばらく経って、ようやく落ち着いてくる。

胸のざわめきを深呼吸をしてどうにかなだめると、血の気の通い始めた顔をピシヤリ、と軽く叩いた。

こんなところに座り込んで目立ってる場合ではない。

立ち上がるが、足取りが安定していなかった。

まるで酔ってしまったかのような、肉体と精神が切り離されたかのような乖離した感覚に包まれていた。

俺は病院行きのバス停のベンチに腰かけてバスを待った。

まず病院に行き、俺の存在を確認しなければならぬ。

時間に余裕があれば神社に行くつもりでいた。

いや、できれば今日中にアクセスしなければならなかった。

思考に沈む俺の前にバスが停車する。

ブロロ、とエンジン音を響かせてバスが動き出す。

真紅の髪を持つ少女が乗り込むと、病院行きのバスが走り出して
いた。

バスの中から眺める空の風景は灰色に変わっていた。

0 - 2 起きたら幼女だった…… (後書き)

病院>神社ルートで進めます。

0 - 3 病院 現実と俺

病院

俺が見上げた治療室の扉のその向こう側では手術が行われていた。

時刻：一六時二〇分

手術中のランプが点いたそれから目をそらす。

立ったまま、どうしたらいいのかもわからずに、控え室の前をうろろろしていた。

司が病院に到着してから三時間、合計してすでに六時間、手術を開始してからそれだけの時間が経過していた。

大丈夫だ、死にはしない。

気休めにもならない心の眩きだった。

無事に手術が終っても、植物人間が確定しているなど知りたくもない事実だった。

かなりの重体であったことは司も映像を通して見ていたが、どれほどのものかまでは確認できていなかった。

もし意識が戻ったとしても、五体満足に完治するという保証などどこにもないのだ。

リハビリというものがどれだけ苦しいのか、高校二年のときに足を骨折して入院したことがある司は思い知っていた。

あのときでさえ、不自由な足一本満足に動かすどころか、足とそれを動かさそうとする全身の神経の不一致に苦しんだのだ。

奪われたものは二度と元には戻らない。

事故というものは常に不条理で、信じられないタイミングで襲い

掛かってくる。

巻き込まれるのは本人だけではない。
家族全体が事故がもたらしたものと戦わねばならないのだ。

通路脇のソファに腰を下ろす。

通り過ぎた看護婦がお大事にと声をかけて頭を下げて通り過ぎる。
赤い髪の少女を手術中の患者の縁者だと思ったのだろう。

何時間もそこにいれば誰であってもそう判断することだろう。
時間の経過と共に焦燥感が司の表情を堅く、無表情なものへと変えていた。

時計はチクタクとただ時刻を刻んでいく。

寒い……

足元から冷えてくる感覚に司はもよおしてきて、恥ずかしいながらもトイレに駆け込んでいた。

一瞬迷ったが、中身はともかく、女の子の外見で男子トイレに入ることなどできない。

清潔なトイレの個室に籠ってお腹をさする。

やはり冷えていた。

半ば素足を晒しているし、革ジャン以外の暖かい衣類がないのが原因だろう。

しかし脱ぐのか……

司を戸惑わせたのは男と女の肉体上の異なる一部分についてである。

部位は同じなれど、立って済ませたりできない仕組みであることは理解していたから、ズボンを下ろして、極力見ないようにして便器に座り込む。

興味があるない以前に、それが自分の器官であるという点が非常にナイーブな問題を司に与えていたのである。

腹に込めていた力を解放すると、生理現象に則った排泄感覚が襲い、体をブルリと震わせて行為を終えていた。

下着は何も考えずにトランクスなどを履いてきてしまったのもよくなかったのかもしれない。

男のときはなんでもなかった行為に過ぎないのだが、肉体に合わせた服を着るのも体調管理の一環になりそうだった。

そんなことを考えながら俺はトイレを出る。

周囲の雰囲気が一変していた。

妙に騒がしい。

緊急治療室の近くには家族のための控え室があり、声はそこから聞こえてきていた。

知った男の声と、ここにはいないはずの両親の声。

思わず革ジャンごと自分の腕を掴んでいた。

親父……お袋？

しばらく電話越しでしか聞いてこなかった肉親の声だ。

間違えようはずもない。

控え室の近くに寄って、半ば開け放した扉の中からは、俺が死角となる位置から中を覗き込んだ。

三人ほど人がいて、一番目だつて見えた背中俺のよく知る人物だった。

彼は俺の大学の先輩に当たる人ですでに卒業し、この海鳴にある企業に就職し、司も最近はよく相談に乗ってもらっていたし、個人

的な恋愛に関することまで相談できる信頼できる人だった。

仲居……先輩、とその名を呟く。

先輩がおそらく両親をここまで連れてきたのだろう。

その向こう側にお袋の顔がちらりと見えて、何か言ったのか、親父が笑った。

変わらない。

お袋は息子がこんなことになってるのに冗談が言えるのだ。

俺は両親が四〇手前になってから生まれた子どもだった。

二人は俺が海鳴の大学で一人暮らしすると宣言したときも、親父は頑張り、と一言言って、体には気をつける、とかなり素っ気無かったが、一人息子が自立することを受け入れてくれた。

二人とももう六〇過ぎで孫がいても不思議ではない歳だ。

司がコウノトリとお嫁さん同時に連れてこないかねえ、とお袋は冗談交じりによく言っていた。

結婚とか子どもとか、まだ遊びたい盛りが強い俺には気が早いと思うことでそういうことから逃げてきたが、親父ももう歳だったから、最近は電話すると、親父もいつ戻る？ と訊いてくるようになった。

後数年、卒業して何年かは社会に出て勉強したいと逃げていた。好きな人のこともあって、そういう現実から目をそむけ続けた。きた。

すべてが言い訳だ。

離れているのを幸いにずっと言い訳をし続けてきて、また逃げるように今度は事故に遭った。

なんて好き勝手な息子だろうか。

「どうかしたのかい？ お嬢さん」

「え、いや……」

目の前に親父が立っていた。

白髪が混じった黒髪にセーターとスラックス姿で、スラリと様子見のいい姿勢で俺を見下ろしていたが、警戒心を抱かせない柔らかい味のある笑みを浮かべていた。

「その、すみません……」

「あれ、君は？」

お袋が廊下に佇む赤毛の少女に気がついて顔を向けていた。

同時に振り返った仲居先輩が俺を見て、いぶかしむように声をかけてくる。

それに答えずに、俺はくるりと親父に背を向けて駆け出していた。そのまま階段のある方へ行き、飛び降りるように駆け降りて行く。誰ともすれ違わず、追ってくる様子はなかった。

病院を飛び出して、荒く乱れた息を吐き出していた。

熱の籠った白い息が肺から吐き出されて、周囲との温度差を明確に浮き彫りにする。

くそ……

俺はどうしたらいいんだ。

空はどんよりと曇り灰色の分厚い雲が重たげに漂っていた。

見上げた空から、ポツリポツリと雨粒が降ってきて、その一滴が冷たく頬を濡らしていた。

行こう、風邪引いちゃう……

気がつくと、スニーカーをかたっぽ履いてないことに気がついた。

どうしても戻る気にはなれない。

俺はもうかたっぱのを脱いで手に持って歩き出していた。

冷たいアスファルトと冷たい雨に心まで冷えてしまいそうだった。
生きている証が欲しかった。

0 - 4 小さな神様と俺

雨が振り落ちる。

水滴が絶え間なく石畳を打ち付ける。

冷たい雨だった。

革ジャンを羽織った赤い髪の少女が境内に足を踏み入れていた。

周囲に人の姿はほとんど見られなかった。

敷地内には玉砂利が敷き詰められ、渡り石を無視して、少女は真っ直ぐに本尊のある建物の方へ歩いていく。

目的の乾いた場所に辿り着くと、石床に水滴が落ちて黒い染みの点が無数に広がっていく。

濡れた長い髪が額にぺたりと張り付いて、少女はそれを直すこともせず、白い息を吐きながら建物の乾いた場所に座り込んでいた。

疲労感と寒さによる体調の不良も放り出すように柱に頭をつけていた。

すべてが億劫になっていた。

海鳴神社、この場所に間違いなかった。

全身がずぶ濡れだった。

バスを乗り継いで、山道を歩き、ようやくここに辿りついたものの、すでに気力は尽きかけていた。

幼い肉体にまだ慣れていないことも大きかったが、病院で精神的に追い詰められ、帰るべき場所も見失っていた。

今のアパートに帰ることはできない。

おそらく両親が来る可能性が高く、帰るといふ選択肢がなかったのである。

素足のアンバランスな格好の少女はバスの中で奇異の目で見られたものの、声をかけられるようなことはなかった。

今日が日曜日で助かったということもある。

平日であったなら少し不味かったかもしれない。

今の俺が警官に尋問されるのはすごく不味いからだ。

何よりも身元を詮索されるようなことがあると困ったことになる。

今の俺の身元を保証してくれるものは存在しない。

何よりも戸籍というものが適用されないのだ。

むしろそれらの存在は、今の俺にとっては大きな障害として目の前にあった。

この世に存在しないはずの存在になっているのだ。

「神様……いるのかよ？ いたら、出て来てくれ……」

何とか言葉を吐き出していった。

するとしばらくして、数十秒なのか一分くらいだったか……変化は奇妙な感覚と共に起こった。

まず、丸い何かが雨煙るの向こう側から歩いてくるのが見えたのだ。

ひょっこりひよこひよここと、傘代わりに大きな葉を頭上に担いでいて、何体かがまとまっていた。

それは丸かった。

他に表現のしようがねえくらい丸い生き物だった。

ようやくはつきり視認できる距離まで近よると、俺の前に手のひらサイズの卵みたいなの……そいつは神主とかが着るような服をまとった生き物だった。

何だこいつ？

多分、ジト目にもなってたかもしれないが、なんといいかわからない俺は呆然とそれを眺めていた。

イメージ的にお米粒が擬人化されたような、生物とは呼び難い「何か」であった。

葉っぱの傘を振って水滴を散らすと、五体の手足が生えたふっくらしたお米粒がいた……もはや形容しがたいのでお米粒でいいだろう。

アニメーションにするなら実にシンプルなデザインであると言える存在だった。

「あいやこれは、もしや神様ではございませぬか？」

「何処の神様であらせられるや、お客人が神様とは恐悦至極でござる」

「しゃ……喋った？」

「お初にお目にかかる。我等は海鳴の神様に仕える五米神。拙者はベイチー米一」

「我輩は米二」ベイジー

「それがしは米三」ベイザン

「麿は米四」ベイシー

「わらわは米五」ベイコ

「名前つきとか……ファンシーだな。お宅らも神様なの？」

「その通りにござい、憚りながらも神の列席に身を連ねておりますが、元は米の精でござった」

「みどもらにどうか神様のご尊名を訊かせてたもれ」

前に進み出るお米粒。

やばい、笑えてしまう。

「天道司だよ」

「なんと神々しい立派なお名前か。さぞや名のある神様であるう」

ねーよ、神様なんてやったことなんてないし。

神様やらないか、とかは言われたけどな。

正直、名前を名乗られても区別がつかない。

要件を告げることにした。

「そ、そう……ここの神様、海鳴様？ 呼んでくれるか」

「これは申し訳ない。主からお客人が来ることは知らされておりましたが、かくも美しき神格を持ったお方とは露知らず、我等、いささかはしやぎすぎたようで」

「お主は話が長いのだ。神様であればご訪問の際には賽銭箱に飛び込んでいただければよいのです」

「さ、賽銭箱って……」

俺は近くにある朱塗りされた年代物の賽銭箱を見る。

どう見てもただの賽銭箱である。

「そこが入り口となっておるのよ」

「磨らが手本を見せようぞ」

「おおそれがいい。ではそれがしが一番手」

賽銭箱に飛び乗ったお米粒が気合を入れてか着物の袖をまくると
賽銭箱の中に飛び込んだ。

続いて、磨だかわらわと名乗ったお米粒も飛び込んで賽銭箱の中
に消えた。

「ちょ……サイズの俺は無理じゃ……」

「あいや、心配召されるな。神と呼ばれるほど靈格の高いお方なれば入り口は広き門となります。故にただの人では我等を見ることができませんが、天道司様ほどのお方であればお茶の子さいさい、すすつと神様のお社に辿り着けましょう」

「そ、そうなのか……」

「では我輩もお先にゴメン！」

と、お米粒がまた一匹賽銭箱に飛び込んだ。
残った最後のお米粒が俺の肩に飛び乗った。

「不慣れでございましょうが、拙者が案内役を務めさせていただきます」

「はぁ……」

俺は賽銭箱の真上の引き綱と鈴を見ていた。
やるしかないのか？

もはや非常識の世界だが、やらねば会えないのだ。

「な、なんか呪文とかいるの？」

「いりませぬ。飛び込めばそこは我等の里にござる」

「わかった……」

バカなこととして痛い思いをするかもしれないのだが、眼を瞑ったまま、賽銭箱に手をかけていた。
なるようになれ！

そして俺は跳び箱を飛ぶ要領で箱の上に飛んでいた。

次の瞬間、突き抜けるような感覚と共に、俺は暖かな風が吹きすさぶベージュ色の世界の中に落ちていった。

「司様、司様！」

「……ん」

「司様、起きてくだされ」

耳元で声が聞こえて司は目を覚ました。

体を大の字にして草っ原に仰向けに寝ていた。

目の前にはお米粒……もといお米の神様がいた。

確か米一とかいう名前だったっけ。

気持ちのよい風がさわさわ吹いて、草花を揺らす。

花の匂いだろうか？

それが鼻先をくすぐって、こそばゆさにくすぐったく感じる。

ふわふわした気分になって思わずあくびを連発していた。

頭上を見上げると、黄色とピンク色の入り混じったような空は雲まで淡い色に染まっていた。

太陽は見えず、地平線の果てまでベージュが続いていた。

「……どこだ……」

気だるげに体を起こすと、衣擦れの感覚が伝わってきて、違和感を覚えていた。

胸元、そして脚を見ると着ているものが変わっていた。

赤い長袴に単の着物とその上に水干を着ていたのだ。

髪も乾いていて、乱れ髪ではなく、櫛を通したかのようにきれいに整えられ、白いリボンでゆったりと幅を持たせて結わえられてい

た。

目の前にいるお米粒も狩衣に服装を変えて烏帽子までかぶっている。

いきなり平安時代になった……

時代劇でも滅多に見ない服装に俺は戸惑いを隠せない。

普通の和服さえ着たことがないのだ。

大学の資料室にある絵を見たことはあるが、着物の詳しい名称までは覚えていなかった。

「主様のところにご案内する前にお召し物を用意させていただきました」

「あん？」

立烏帽子を差し出すお米粒。

まだ何となくぼうっとしたままの頭でそれを受け取り、ただ何となく長い帽子を眺めていた。

普通にかぶりゃいいのか？

頭の上に長い帽子をかぶせて、慣れない手つきで紐を探る。

「ずれとりますぞ」

米一が飛び上がると帽子を蹴っ飛ばして、司の頭の上の帽子の位置を変える。

「サンキュ」

「どういたしまして」

丁寧に答える米一。

まったく神様らしくない姿だった。

女の子ならこういつときどいつ反応を示すのだろうか？
かわいい？

わかんね。

かわいいかも知れないが、姿が女になったからといって感性まで
が変わるわけではない。

多少は肉体に影響されるのかもしれないが、今のところ俺は俺で
しかない。

「他のはどこ行ったんだ？」

お米粒の仲間がどこに行ったのか気になって訊いた。

「先にお社様のところへご報告に……」

「お社様？」

「あそこに見えまするのがご本尊でございます」

米一が指差す先に透明な水をたたえた湖畔が見えて、赤い大きな
鳥居が水面に突き出すようにそびえ立っていた。

それも一つや二つではなく、湖畔の向こうに見える、水の上の建
物まで続いていた。

赤い屋根の離宮、そう表現するのが相応しいだろうか、寝殿造り
の建物が水面にその姿を映して二重に存在するかのようだった。

どこかの文化遺産みたいだな、と俺は感心してそれを眺めていた。
ただし、その規模は実物よりかなりでかい。

建築様式的に平安時代の寝殿造りであることは理解できる。

それを湖畔の上に建てている、というのは現代人の俺からすると
かなりぶっ飛んでいた。

水っ気で腐らねえのか？ とか、湿気やばくねえ？ とか、無粋

な思考をしてしまつう。

まるで幻想の世界の中に迷い込んだようだった。

「ここ……本当に寶錢箱の中なのか？」

「左様にございます」

「海鳴の神様つて何者だよ……」

司のその言葉に米一は胸を張ってにっこり笑う。

「我が主様はこの地の守り神でございます。古の時代より、拙者が生まれる前からこの地を治めております」

「あ……」

声を上げたのは空の色を映した水面から一斉に白い鳥の群れが飛び立ったからだ。

三角上に群れを成し、揃って羽ばたく様は美しかった。

「行きましょう。船を待たせとりますからな」

「船？」

鳥達が飛び去った方角を眺めたが、あの建物まで行くのか、と今更ながらに司は気後れしていた。

何せ、あのとき神様にどんな口を訊いたのか忘れたわけではなかった。

「司様」

「おっ……」

その声に促され、俺は足袋を履いた足でなれない服の袖を揺らしながら、湖畔の側の船着場で手を振る米一のところまで降りていく。

「この者が船頭のミズハシでございます」

舟の上の船頭を米一が指差すと、背中を向けていたその男が横顔を向けて頭を下げた。

着ている服は粗末な着物で、素足をさらし、胸元の濃い体毛をさらしていた。

異様に手足が長く、身長は軽く2メートルを超え、その背を異様に曲げてせむしであるかのようにだった。

頭髪は白く頭の両側はそり上げていた。

大きな目は魚のような目でぎよろりとねめつけて、見つめられると背筋がぞくりとした。

奇異な外見の男だった。

まるで妖怪だ、と俺はその男にそんな感想を抱いていた。

「ミズハシ、主様の大事なお客様だぞ。丁重にやってくれ」

米一にミズハシがゆっくり肯いて、もやい綱を外していく。

促されるままに舟に乗り込むと揺れて、なれないままに座り込んでいた。

内心冷や汗ものである。

船上から見える水面は近くて、この舟で大丈夫なのかと不安になっってしまう。

その不安そうな赤髪の少女の横顔を水面が映しだしていた。

そのとき不意に視線を感じて振り向くと、ぎよろりとした目のミズハシと顔を合わせていた。

「ど、どつも……」
「……………」

俺が頭を下げると、ミズハシは応えず、櫂を水につけて漕ぎ出していた。

船着場から舟が離れて、小さな揺れにドキドキしながら、風切る舟が受ける風を肌感じていた。

揺れないように重心を舟の真ん中に置いて、バランスを取ろうとへりに両手を置く。

目指す建物はずいぶん先だが視界をさえぎるものは何もなく、幾重にも連なる大きな鳥居だけが見えていた。

建物の向こうは空と同じ煙るような淡いベージュ色で、この湖の大きさを測ることはできなかった。

2、3キロは悠にあるだろうか、鳥居と鳥居の間の距離を目算で測るが、こんな巨大なものを建てる技術って、神様の世界つてもしかしてすごい技術進んでるのか、とかそんな埒のないことを考えていた。

懐を探った米一が笛を取り出して、俺に向かって掲げて見せると、それを口に当てて吹き始めた。

音の調べが小さく、ゆっくりと流れ始め、湖にこだましていく。

水上を舟が通り過ぎ、櫂を漕ぐ大男、笛を吹く小人、赤い髪の少女を乗せて、水面を揺らしながら流れていくようだった。

ミズハシは一言も言葉を発さずに、ただ船を漕ぐことに集中しているようだった。

揺れはほとんど感じられない。

うまいものだ。

俺もボートなら漕いだことがあるけれど、こんな風に漕ぐのは無

理だな、と船頭の動きをじつと見入っていた。

いつだったか公園で彼女をボートに誘ったことがある。

結果は散々で、しばらくはボート漕ぎの練習をした。

あれから一度も彼女を誘うことはなかったのだが。

「もう到着しますぞ」

考え事をしていたせい、いつのまにか、笛の音が止んでいたことに気がつかなかった。

声をかけた米一に意識を引き戻され、いつの間にか目的地にかなり近くまで来ていたことに気がつく。

建物の荘厳さは遠くで見た姿と同じであったが、近くで見るとまったく違った。

まず円柱の太さは大人五人が腕を回したほど太く、顔が映るほど磨かれており、ミスゴケの浸食さえ許していなかった。

その支柱群が数百から千に至り、建物の底、天井まで一〇メートルはあるだろうか、円柱に反射した外光が内部まで差し込んで、水面に反射してきらきらと輝いていた。

舟は支柱群を通り抜けながら、奥へと向かっていく。

やがて現れたのは開けた場所で、上方の建物へ続く階段と、段差になった踊り場、そこから船着場へ下りる階段があった。

その船着場に向けてゆっくりと舟が水をかき分けていく。

ガコン、と音を立てて、減速した舟がぴったりと船着場に舟を止めていた。

開けた場所に出て俺は目を細める。

まぶやしやかなほどの周囲の建物の威容に圧倒されていた。

まるで貴族か皇族の住まいのようである。

その水上の離宮はなにもかもが現実のものとは思えなかった。

「ミズハシ、ご苦労。これが礼だ」

と、米一がじゃらりと音を立てた布袋を差し出すと、ミズハシの大きな手がそれを受け取って懐に突っ込んだ。

無言で頭を下げ、ミズハシが船着場に舟を固定する。

俺は立ち上がるうとして、足が痺れていることに気がついた。

ミズハシが見ているのを意識して、何とか立ち上がるうとする。

あ、ヤバイびりびり来る……

「うわ、おっと」

無理をして立ち上がるが、途端に船が揺れて、バランスを崩していた。

落ちる！

そう思った瞬間、長い腕が伸びて、司の腕を掴んで、次の瞬間には抱きかかえられていた。

高い、その感覚に体を硬くする。

硬直したまま抱きかかえられ、ミズハシは抱えた司を船着場に下ろしていた。

「ありがとう……」

礼の言葉を述べると、ミズハシは目をぎよろぎよろ動かした。意思表示なのだろうか？

そのミズハシの頭を米一が飛び蹴りしていた。

「バカモノ！ 司様にあまり長く触れるでない！ 神の一柱であらせられるのだぞ」

「えっと、いや……」

俺はお米粒を掴む。

恩人にそれはねえだろ？

「ミズハシ、ありがとうな」

改めて正面から告げると、頭を下げ、身を低くしてミズハシは舟の近くに控えて座った。

手の中でお米粒が暴れる。

「お放しくだされ〜」

「おいお米粒」

「はい？」

手のひらを開いて米一を睨む。

「水に落ちそうなのを助けてくれたんだ。それをあんたがどうこう言うなよ」

「いや、しかしですな……水妖ごときが触れて……むぎゅっ」

「ごときってなんだよ？」

手に少し力を込めて、手の中のお米粒を圧迫する。

「へ、へるぶ〜」

米一が弱弱しく叫び、俺は力を緩める。

こいつらの世界のこととはわからねえが、何となく、ミズハシが蔑ろにされる存在であるというの理解できた。

「これこれ、いじめるのはそれくらいにしておけ」

老人の声が響いて、俺は顔を向ける。

いつ姿を現したのかはわからないが、束帯姿の老人……海鳴の神が立っていた。

0 - 6 ヴィータ 神様はじめます

「不機嫌じゃのう」

「別に……」

渡り廊下を歩く神様と俺。

眼下には湖が見えて、ベージュ色の霞がかつた空が見える。

高さにビル五階分上からの風景だった。

木造建築としては破格に高い。

高校の修学旅行で訪れた清水の舞台を思い起こさせた。

海鳴様、神様はここには沢山いるみたいなので、海鳴様と呼ぶことにする。

その海鳴様が欄干の前で立ち止まったので、俺もすぐ後ろで止まる。

「その格好、なかなか似合っておる。馬子にも衣装か」

ニヤニヤと笑って、水干姿の俺を眺めていた。

何となく気持ち悪い。

「説明しろ」

「うん？」

「だからよお、今の俺は何なんだ……」

「いわば、その姿はお前さんの分身よ」

「分身？ どういう意味だ」

まあ、座れ、と海鳴様が通路に座り込む。

格好からするとかなりフリーダムな行動である。

位が高い人の装束なんだけどな、とどうでもいいことを考えていた。

「簡単に言うとな、その肉体は神気でできた天道司の魂の拠り所である。現世に姿形を持ちえたのは神性の現れよ。通常ならばそこらを漂う靈魂の一つになるが、お前さんを喰らおうとする輩があまりにも多いのでな。お前さんの魂をお前さん自身の神気に閉じ込めて召喚したのよ」

神気？ 神性？ 両方とも馴染みがないせいかしっくり来ない。

「神気ってなんだ？」

「気とかわかるかの？」

「まあ、何となく……」

「万物にはすべからく神気が宿っておる。お前さんにもわしにも、普通の人間にもだ。根本的な生命の力だと思えばよい。病気や怪我をすれば神気も損なわれる。神気がすべて失われれば生命は死に至る。今のお前さんの肉体、天道司は神気をどんどん失っている状態よ」

「……放っておけば死ぬってことだな？」

「うむ、それをのう、お前さんの神気でその肉体、ヴィータを造り上げた」

「造ったって……ヴィータ？ 名前があるのか？ 何で？」

自分の小さく華奢な手を見ながら問いかける。
造ったとか…… 人造人間？

頭の中で研究室で怪しいマッドサイエンティストに改造される姿を想像する。

ヴィータって何だ、日本語なのか？

「わしの蓄積した数多の記録から、お前さんの魂と相性のいいもの

を選び出し、肉体の寄り代として再構築した姿がヴィータよ。元が神気、そこに型としてヴィータの原型を与え、魂の統一化をしたものが今の天道司を構築するものになっておる。造った、と言ってもわしは特に手を加えてはおらん。肉体を構成するものは元がお前さん自身の神気、ヴィータとの相性のよさはお前さん自身の魂が選び出したもの。体を動かすのに何の不都合もなかったであろう?」「まあ……そうだけだよ……つまり、この体にはこの体の元のデータがあると」

元々誰かの肉体であったのか?

疑問が湧き出てくる。

「ククク、気持ちはわからんでもない。幼子の女兒の姿であるから。う。お前さんはその肉体の持ち主がいるとか考えたかの?」

「ああ……」

「心配せんでも、お前さんの元にはなっけていても、憑依したとかではないことは先に説明したとおりよ。すべてお前さん自身で構成されたもの。その姿がお前さんの神としての本当の姿と言ってもよい」

まだ理解したわけじゃないが、納得したことにする。

俺自身がよくわからない。

それにこだわるよりもっと切実な問題があった。

「俺が元の体に戻るにはどうすればいい?」

「穢れを祓うことでそれをお前さんの力に変えることは言ったの? それを成すことができるのは神性の高い魂を持ち、力を得たものだけにしかできぬ。いわば神の力の領域となる」

「俺に神様になれって言ったのは……」

「うむ、冗談ではなく本気。神の力を身につけてもらわねばならん」

「どうすればいい?」

「ほう、やる気になっておるのう」

「当たり前だつて……」

「まずこれよ」

海鳴様が懐から白い手帳らしきものを取り出して見せた。

和紙製のようで、独特の質感の手帳だった。

「何だそれ？」

「かみさま手帳じゃ。ここに神様としてのその神の記録が蓄積される仕組みとなつておる」

「はいいい？」

蓄積、記録、手帳じゃねえのかよ、という突込みを抑える。

「噛み砕くとなセーブデータよ。ゲームにあるじゃろ、あれと思つてもらつて構わん。この手帳は神様見習いから与えられる」

と言つて、海鳴様は手帳を開いてパタパタと扇代わりに扇いでいた。

「かみさま手帳、ねえ……」

じつとそれを見て、疑問の聲が籠つた声を上げる。

それがいったい何の役に立つのかわからない。

「個人データの塊だから見せられん。と言つても本人にしか読めん」

「へえ……」

「お前さんの手帳はこれじゃ」

海鳴様を取り出したのは本人が持つと同じものだった。

「って、もうあるし」

「手際がよいのよ。前々から申請出しておいたからの。お役所仕事で頭の固いのがおつての。発行に一〇〇年もかかりよる」

「一〇〇年てあんた……」

「手帳発行は後継者育成の目的で発行されることが多いのよ。上はあまり神の交代を認めたららん。わしは海鳴の神じゃからのう……簡単に辞めさせてもらえんのよ。そいつが貴重なものだど理解したか？」

しみじみと言うが特に同情の気持ちは起こらない。

「こんなすげーとこ住んでて文句は……少なくとも俺は起こりそうもない。」

「へえ……」

それをしげしげと見てみると、海鳴様がこつちに手帳を放り投げたので、慌てて手を伸ばしてキャッチしていた。

「今貴重だつて言っただけじゃねえか、言ってることと行動が合っつてねえ。」

「さっそく手帳を開くと、最初の頁に神様名とあつて、黒筆でヴィータと記されていた。」

「おっさん、何だよこれは……名前欄がヴィータになってるぞ……」
「今のお前さんの姿に合わせた名になっておるだけだ。今の肉体と魂は限りなく素体のヴィータのものと同調しておる」

さらにめくると、基本性能とある。

スペック表か……取扱説明書かよ。

しかしだな。

「えーと……アイゼンなんかとか、バリアジャケットってなんだ？ 明らかに日本語じゃねえ……」

「その説明書はちゃんと読んでおけ。ヴィータの基本性能はそこに書いてある通りよ」

「かみさまポイントって何だよ？」

最初の頁の下にそう書かれた項目があったので訊いてみる。

○の隣に（き）と書いてある。

「神として活動すると自然に加算されていく仕組みになっておる。今は○ポイントかの？」

「ああ」

「いわば経験値よ。ある一定溜まればレベルアップする」

「おいしい？ 神様ってレベル制度なのかよ！」

「まあおう、今のお前さん、ヴィータと固定するぞ。ヴィータのレベルは1じあの」

「レベル1とか……ゲームやりすぎじゃね？」

つまり（き）がレベルか。

まるでRPGじゃねえか。

「制度を作ったのはわしじゃないから文句言われても困る」

「で？ レベルが上がるとどうなる？ 強くなって見習いじゃなくなるのか」

「おおむねその通り。見習いから三級神、二級神、一級神となっておる。力の制限もあっての、限定、非限定、一種、二種と細分化もされておる」

「免許みてえだな……」

「うむ、級に関係なく力を制限される決まりでな。本当に力を持つ

神様というのはこれらの制限からは解放されているのよ」

「おっさ……海鳴様はどうなのよ？」

「わしか？ わしは一級神、限定一種。ちなみにレベルは533じゃ」

自慢げにひげをしごいて海鳴様がドアップになる。

「……そ、そう。ドヤ顔すんな」

「ふはは、何すぐ追いつく。それと、溜まったポイントは特殊技能の獲得にも役立つぞな」

「技能ときたか、どういうこと？」

「例えば、こうじゃ」

神様が宙に手を掲げると、その手に盆が現れて、小皿に菓子類が載せられていた。

「ご丁寧に急須に湯飲みまでついている。

「な……」

どこから取り出したんだよそれ！

「取り寄せ、の力じゃよ。こういった特殊技能をポイントを貯めることで獲得することができる。経験値と引き換えだから、技能ばかり取るといつまでも成長できんがな」

「すげえ……」

「取り寄せは結構簡単な能力よ。お前さんもすぐ覚えられるわ。これぐらいの特典がないと神様などやっておれんのよ」

海鳴様はずーっと湯飲みに注いだ茶を啜ってみせる。

何だかよくわからねえが、俺もこれをできるようになるってか？

「やる気が出てきたかのう？」

好々爺と笑うおっさん、手口がなんかいやらしい。

何を企んでいるのやらわからないが、こっちだって死にたくねえ。神の力でも何でも使って自分の身は自分で守るしかねえ。

「やってやるよ神様見習い」

お茶をがぶりと飲んで俺は不敵に笑って見せた。

0・7 ヴィータ 雨に沈んで（前書き）

お米粒の口調に変更あり。

前の記事のをまだ直してない。

0-7 ヴィータ 雨に沈んで

海鳴様についていくと、お社の奥に続く、通路の幅が悠に二〇メートルはある長い廊下を抜けて巨大な扉の前に立っていた。

扉に海鳴様が手をかざすと扉が人が通れる分だけ開き、暗くやたら開けた部屋に出た。

前方がぼつと光っていて、段になったその上は祭壇のように見えて、むき出しの岩場になっていた。

青白く光る石が均等に置かれていて円形を形作っていた。

明らかに今までとは雰囲気異なる空間だった。

「何だこれ？」

「これは転送装置よ」

「てんそーそうちー？」

俺は首を傾げる。

「現世に通じておる。海鳴に縁のある社がある場所なら通行証があれば飛べるようになっておる」

「それって、そんなのがあんなら最初からくれよ。ここまで来るの結構大変だったんだぜ」

「ここに来ねば渡せぬじやろうが。それに神しか通れぬようになっておる」

「ふうん。賽銭箱と同じ？ 入り口も？」

「うむ、人は通れぬのは一緒だが」

「へいへい」

「司様！ これをお持ちください」

その声と共に白い猫が現れ、その背中に乗ったお米粒二人が五角形の木印を掲げて部屋に入ってくる。

トタトタと猫が俺達の前までやってくると立ち止まり、姿勢を正すとお米粒が振るい落とされ、白い猫は気にも留めずに毛繕いを始める。

「えっと、お米粒……何してんの？」

目の前で重なるお米粒に声をかける。
当然名前は覚えてない。

「それがし米三、でござる」

「我輩は米二、である」

転がったままお米粒二人が答える。

「……どう見ても同じ顔だわ」

「我等は元々同じ存在。拙者達に名前をつけてくださったのが主様でございます」

最初に立ち上がったお米粒……米一？ が木印を掲げてそれを俺に差し出してそれを手に取っていた。

絵馬だな、うん、どう見てもそんな感じ。

「おめーは米一か？」

「正解じゃ」

そう答える神様。

「あと二人いたよな？」

「米四と米五は別の仕事じゃ。後でお前さんのとこにやるわ。通行証の使い方はこやつ等に訊け」

「はい？」

「司様、いえヴィータ様。どうか拙者達もお連れいただきたく」

お米粒三人が目の前に並んで座った。

「いただくって、なあ……」

「何、こやつ等はこう見えても役に立つぞ。連れて行け」

「まあ、いいけどな」

「ありがとうございます」「……」「……」「……」

「よく聞くと微妙に口調が違うのな」

「昔はみんな同じだったからの、区別するために変えさせた。今でもときおり変だがな」

「あつそ……」

「ああ、そうそう、向こうとこつちでは時間の流れが違う、というより、こつちでは時間という概念が存在せんのだよ。いわば向こうからすると止まった世界、普遍に存在する世界となっておる」

「どういふことよ？」

「今のお前さんがこつちでどれだけ過ごそうと、ここでは時間は停止しておる。現世からすると時間の狭間にあると言っている。そこに紛れ込んだものは例外なく現世の時間から切り離される。神の世界は人間世界とは異なる理で動いておる。百年前も後も我等にとつては同一のものとなるのだよ。まだお前さんには早い話だな。お前さんはまだ向こうの理に生きておる。難しく考える必要はない」

「まったくわかんねえ……」

「通行証には記録帳があつてな。一度潜った門はそこに記録される

ようになっている。今はここと一つ設定してあるだけよ。これがあればほぼ移動時間はゼロになる」

「すっげー便利だな、おい」

「すごいじゃろ？」

「あんたじゃなくて、これがな」

「ハハハっ」

「これって海鳴神社に出るのか？」

「お前さんの家の近くに門を作っておいた。そこに飛ぶようにしてある。お前さんの向こうでの肉体は、本当はこの外の神社に置きっぱなしよ。ここにいるお前さんはいわば魂のみと理解するがいい」

えーと、幽体離脱してこっちに来てるってわけか？

魂と幽霊の違いって何だ……

ピンチでこっち逃げてても意味がないわけか？

体の残してあるって、どういうこった。

俺の考えどこか違うのか？

「おかしくね？ 魂しか飛ばないわけじゃない？ 肉体も飛ぶの？」

「いいか、この通行証を使った移動では基点を結んだ地同士の賽銭箱に肉体は一瞬で移動する。その際、お前さんの魂はこちらの世界に飛ばされる、それをタイムラグと思え。今のお前さんのいる時間がそのラグタイムだ。実際の現実世界での時間経過はゼロだがな。」

ここに在る限り時間は過ぎぬが、お前さん自身は現実時間の現世には影響を及ぼせぬ。そうするには現世の肉体に戻らねばならん」

「んつと……俺がこっちに来て、肉体は海鳴の神社にあつて、この通行証を使うと、うちの近くの神社に出るってことか？ ここに入った時間と同じ時間に転送されるつと……今の俺は賽銭箱に飛び込んだラグタイムの中に在るってことか。肉体に戻って転送が終れば時が動き出す」

「理解できたか？」

「何となく……」

「そういうことじゃ、問題なく飛ぶからさっさと行け。わしは忙しいのよ」

海鳴様は面倒そうに手を振ってみせる。

「時間過ぎないって言ったじゃねえの？」

「おうよ、それはお前さんにとっては大だ。人間世界で起こったことはリアルタイムで飛び込んでくる。時間に関係なく神に暇なしじゃ」

「んじゃ行くぜ」

「お供いたしますぞ」

転送装置の岩場の上に立つ。

お米粒達が俺の肩に飛び乗る。

絵馬の型が岩場に掘られていて、言われなくてもそれをはめればいいのだなと理解する。

「通行証を使うと門は転送装置に直接繋がりまする」

「なるほど」

「手をそこにかざすでござる」

米三の言葉のままに通行証の上に手を置いた。

通行証に絵が浮かび上がる。

二重に重なっていて、もう一度手をかざすとスライドして浮かび上がった。

「タッチパネルかよ！」

突っ込みながら、その絵がどこかで見たことがあると思ったら、

神社にある押し印だった。

スタンプラリーとか前に一度やったことがあるので覚えていた。

「まさかあれが転送装置のキーだったのかよ……」

「選択式、である」

「各神社に印がありますゆえ、通行証に記録していくと飛べる範囲が増える仕組みですぞ」

「おっけおっけ」

タッチパネル？ を押すと、浮き出た絵が通行証に沈み込んで赤い光に包まれる。

光が全身を包んで、その光そのものに全身が溶け込んでいく。

現実

雨が降っていた。

手足は冷たく冷え切って、凍えるような寒さの中に身を沈めていた。

境内の一角、海が見晴らせる近所の神社だ。

あまり来るわけじゃないから馴染みじゃなかったが、よく知った風景だった。

転送装置で飛んできたのはアパートから歩いて二分の神社だった。

神社の名前は覚えていない。

俺はひたすら重い肉体を賽銭箱の縁に手をかけて立ち上がっていた。

五角形の絵馬がカコンと音を立てて転がり落ちる。

それを苦勞して拾い上げ、水滴がポタポタと落ちる。

突然境内に現れた不審者を咎めるものはいない。

幸いなことに雨が降っているせい、人っ気は一切見られなかった。

飛ぶにしても人が少ない時間とか、気をつけないといけないことが多そうだった。

あまり知られてない神社を巡るか、と朦朧とする意識でそう考えていた。

階段を下り横道を抜ける。

坂が多く、岩棚が積み重ねられた壁の水抜け穴から大量の水が落ちていた。

激しさを増した雨の中、俺はアパートの近くに立ち、自分の部屋を見上げた。

明かりがついている。

誰がそこにいるのか見当はついていた。

帰れない

背を向けて当てもなく歩き出したが、泥に足を滑らせる。

泥水の中に膝を突き、フラフラする肉体を土塀に持たれかけていた。

空を見上げる。

どこまでも灰色だった。

雨が熱を体温を奪っていく。

もう歩くことができない。

打ち付ける雨の強さに、目を開けていることもできなくなって、俺は座り込んでいた。

あれ、おかしいな……動けよ、俺の体。

ヴィータ・フェードアウト

0 - 8 ヴィータ 目覚めて

シュー、何かが噴出す音が聞こえたような気がした。

目を覚ました俺の体は動かない、いや動けないと言っるのが正しいだろうか。

ひたすら体は重く、指先一つさえ動かそうとすると痺れて張っていた。

たぶん金縛りとかそういうのとは違う。

寝ているのはおそらくベッドの上、柔らかい布団と毛布、シーツの感触とわずかに感じるお日様のおい。

頭の裏にはタオルで巻かれた氷枕、額には水で濡らした手絞りタオル。

それはすでに熱を吸って生暖かいものになっていた。

熱い吐息を吐き出す。

俺の部屋ではない。

首を横に向けて見えるのは、整然と片づけられた室内で、おそらく女性の部屋であることが理解できた。

窓際のツタが這う緑のインテリアやテーブルの上の色とりどりの小物のビンと陶磁器の人形が見えて、花の香りか何かだろうか、そんな匂いをあまり利かなくなった鼻で嗅いでいた。

部屋の隅にストーブがあって、赤い火が軽く揺らめくを見た。

その上にやかんが置いてあり白い煙をゆらゆらと吐き出していた。シュー、という音はそのやかんが立てた音だった。

ここはどこで誰の部屋なのだろうか？

思考力の落ちた頭では理論的にものを考えられそうになかった。だがこの匂いをどこかで知っているような気がした。

荒い息を吐き出す。

お米粒はどこだ？

視界の中に珍妙で丸く小さなお米の神様の姿はない。

どこににいるのだろうか、と考えるが、もやがかかったような頭では思考を続けられない。

不愉快な汗が額から流れ落ちる。

着せられているのは女物のパジャマのようだが、サイズのヴィータの体に合っていた。

トントン、と扉をノックする音がして、開く音を聴いたが、俺はもう目を開けているのも辛くて目を閉じていた。

起きていることさえ苦痛だった。

意識はあるものの、外界世界をほとんど知覚することができない。まるで夢遊しているかのような感覚に包まれていた。

手足に力を込めるが、まったく動かず、自分のものではないかのようだ。

開いた扉の向こうから、冷氣と人の気配が同時に入ってきて、火照った頬を若干冷ましていた。

不規則に荒い息を吐き出すと、額のタオルが取り除かれ、水を絞る音と氷が触れ合う音が響く。

ささやきあう声が聞こえた。

一人ではない。

二人、いや三人か？

気配と声の質から三人とも女性のように思えた。

どこかで聞いたような気がするのは気のせいだろうか？

顔にタオルが押し当てられ、汗に濡れたこめかみや耳の裏を拭かれ、毛布を剥いでパジャマを脱がせられていた。

共同で脱がせているせいか、あっさりとパジャマを脱がされてしまっ。

俺はまったく抵抗できないままされるがままに任せていた。

背中を支える手と、手早く体を拭いていく、もう一つのその華奢な手はひやりと冷たく、拭うタオルよりも俺の体を冷やしていた。

そしてパジャマを新しく着せられていた。

汗をかいた体は拭かれ、清潔で乾いた布の質感に安堵する。

寝かせられて毛布と布団をかけなおされる。

誰、だ……

俺は朦朧とする頭で、何とか熱ぼつたい目を開いていた。

ベッドの近くに小さな女の子の頭が見えた。

ゆらりゆらりと結われた髪が揺れていた。

すぐ後ろで服を取り替えたと思わしき女性二人がいる気配がする。

その少女はタオルを氷水につけて、ギューッと絞ったのを確認して、広げて丁寧に畳むと、俺の額にそれを乗せた。

目と目が合う。

小学生くらいの女の子だった。

頭の両端をリボンでもって結んでいる、年頃は八、九才を思わせる少女で、目が合うと驚いた顔をして後ろの二人を見るが、すぐにこちらを見返していた。

「大丈夫だよ」

小さく囁くようにそう告げて、無理やり笑顔を作っているようだった。

それに答えようにも、声を出そうにもヒュウ、という言葉にもならない音が漏れて、俺は小さく咳き込んでいた。

わずかなそんな動作も容赦なく体力を奪っていく。

熱い目を開けると、泣きそうな顔をした女の子が心配そうに覗き込んでいた。

問題ない。

そんな言葉さえ伝えられない。

俺は微笑もうとして、感覚が麻痺した体ではどんな顔をしたのかはわからないが、安心させようと何とか表情らしきものを浮かべて見せた。

額が熱い、脳味噌まで茹っっているかのようだった。

再びもやがかかったようなヴェールに意識が飲み込まれて行く。

その最後の瞬間に少女に誰かが声をかける。

「風邪が移るといけないから、なのははもう出なさい」

「はあい……」

女の子の残念がるような声の響き。

なのは、それが名前だったのか、それを判断する気力もないまま俺は深い眠りに就いていた。

数日後？

次に気がついたとき、部屋の空気はポカポカと、窓から差し込む光に包まれて、それだけで暖かった。

ストーブは休眠したかのように火を落として部屋の隅に鎮座している。

静寂に包まれた室内、時刻は朝なのか昼なのかわからないが、閑静な住宅街のどこかであるような気はしていた。

体は相変わらず言うことを聞かないが、腕だけは何とか動かせるようになっていた。

咽喉に溜まったタンを吐き出して、それを何とか処理するくらいはできるようになっていた。

この部屋の主が誰なのか、まだわからない。

あれからどれだけの時間が過ぎたのか、俺の天道司の肉体はどうなったのか、もしや死んでしまっているのではないかという焦燥感が身を包んでいた。

焦りとは別に、静かな空間の暖かな空気に意識は包まれて、また眠りに誘われる。

また目覚めて

お腹が空いていた。

お腹が空くと言うことは体が快復に向かっているということだ。バタバタ、と布団の上で、お米粒どもが相撲を取る音で目が覚めた。

最初に襲ってきたのは耐えようもない空腹感だった。

お前等食つか？

ジト目でそれを眺めていると、審判をしていた米一が振り返った。

「おお、ヴィータ殿！ 目覚めたようで何より。ほい、のこったのこった！」

「おい……」

すっかりしわがれた声で、自分でも声を出して驚いたが、声を出すのも一苦労だった。

ちょうど俺の胸の上で半裸になった白卵、ではない、ふんどし姿のお米粒二人が取っ組み合って、のこったのこった、と声を上げる審判に合わせて、左にフラフラ、右にフラフラしながらなかなか勝負はつかない。

うぜえ……

病人の前だというのにまったく自重しないお米粒ども。

ちよつと意地悪をしてやろうと俺は寝返りを打ってみせる。

「あいや〜」

転がり落ちるお米粒達。

そのときちよつど部屋の扉が開いて、白い制服姿の少女の頭が覗き込んでいた。

ぴよこんとツインテールに結った髪が特徴的な女の子……

確か、名前はなのは、といった。

「ひどいですじゃー」

布団の上に米一が飛び乗った瞬間、俺はお米粒を引っ掴んで、ベツド下のゴミ箱に放り込んだ。

見られたらどうするんだ。

米二と米三は自重してか姿は見えない。

そのまま隠れてるよ。

「あ……起きてる？」

どう答えようか迷っていると、少女は鞆を床に置くとベッドの近くに寄って、小さな座布団の上に腰を下ろした。

くりくりとした大きな瞳が好奇心を込めて俺を見つめていた。

こんな小さな女の子に見つめられて少し恥ずかしかったが、今の自分の姿形は目の前の少女と変わるものではない。

そんな気安さからだろうか、彼女は俺の額に手を伸ばして熱を測ると、今度は身を乗り出して額と額をくっつけていた。

「まだ、ちょっと熱あるかな？ ずうつと寝てたんだよ。三日も寝てたんだから」

「三日……」

三本指を突き出す少女、俺はそれを復唱する。

そんなに長く寝ていたのか……

両親はどうしただろうか？

それよりもここはどこで、彼女は何者なのか？

そう考えると、お腹が不意にグウッと音を立てていた。

「あ……」

「あは、お腹減ってるんだね。待ってて、何か持ってくるね。ああ、そつだ。わたしは高町なのはだよ」

「ヴィータ……」

少女の名乗りにヴィータの名前を告げる。

天道司、という名は今の俺の名前ではなかった。

「ここは、どこ？」

「海鳴市藤見の高町家でーす」

間延びしたなのは声。

藤見……俺のアパートからはずいぶんと離れている。

何せ駅四つ分は離れてる距離だ。

どうしてそこに俺がいるのかまったくもって謎だった。

俺が黙ってしまうと、なのは手を後ろで組んで言葉を搜したようだったが、にっこり微笑んで見せて、ごはん、ごはん、と繰り返して扉を開いて、扉の向こう側から顔だけ出して俺の方を見る。

「ちょっと待っててね。お店に行ってお母さんと、お姉ちゃんに、えっとヴィータちゃんが目が覚めたって教えてくるから」

お母さん、お姉ちゃん……

その言葉に頷いてみせる。

いったいどういう経緯で俺がこの家にいるのか……

それを訊けば、逆に俺が質問攻めにされる可能性が高い。

小学生くらいの少女の行き倒れなど滅多にあるものではない。

身元は？

両親は？

住んでいるところは？

学校は？

他の身寄りには？

想定しうるそれらの質問に答えることは俺にはできない。
いっそのこと記憶喪失と嘘をつくか？

いや駄目だ。

そんなのは、世話をしてもらった人達についていい嘘ではない。何よりそうでない俺自身が知っている。

嘘について、演技をしてまで人を騙すのは性分ではなかった。

だから俺は……

まだふらつく体を引きずるように立ち上がらせて、俺は扉の向こう、階下に神経を集中させる。

人気は感じられない。

静かなものだった。

改めて部屋の中を見回した。

革ジャンはえもんかけにぶら下がっていて、それを羽織っていた。もうすっかり乾いているようで、ポケットを探ると乾燥させて丁寧に紙袋に入れられた紙幣が見つかった。

身元を現すようなものは元から持っていなかった。

絵馬は小さなガラステーブルの上に乗っかっていてそれを手に取った。

「グイータ殿、どちらへ行かれる？」

俺の背後から声をかけた米一。

米二、米三と共に揃ってゴミ箱から顔を突き出している。

「ここを出る」

短くそう告げて、返事は待たずに俺は階段を降り始めた。

「待ってくだされえ」「でござるか？」「いくであるか」

お米粒達が慌てて追いかけてピョンと肩の上に飛び乗った
階段のすぐ下に玄関の採光窓が見えて、一歩ずつゆっくりと降り
ていく。

振り返り再度家の中を眺めてから、頭を下げて玄関の扉を開け放
つ。

お世話になりました。

この親切にも世話をしてくれた高町家の人達に黙っていなくなる
非礼を心の中で詫びながら、俺は玄関から石畳が続く入り口に向か
う。

結構広い家で、敷地にかなり余裕があった。

緑茂る向こうに和風の建物が見えて、道場のようにも見えた。

アスファルトの道路に出ると、俺は当てもなく、空きつ腹を抱え
たまま路を歩き始めた。

0 - 8 ヴィータ 目覚めて（後書き）

さすらいのヴィータ。

そろそろ初戦闘の予定。

細かく名称を間違えた。

0・9 ヴィータ さまよう

ベンチから見える公園の景色は殺風景な絵の中に灰色の絵の具を落とし込んだようだった。

日が翳り始め、先程まで柔らかかった空気は冷たい風に吹かれてどこかに行ってしまった。

温度差から白い息を吐き出して、ヴィータは革ジャンの襟を立ててベンチに深く座り込んでいた。

できるだけ体温を逃さないように。

一、二、三……

俺は頭の中で数字を数える。

目の前に丸い小石が転がって石をはじいていた。

「次はそれがし」

お米粒三人がおはじきをして遊んでいる。

石が飛んで、同時に別の石を飛ばした。

「二個でござる」

「おしい、一個である……」

「ぐぎぎぎ、米三の勝ち……」

無邪気な連中だな……

俺は暢気なお米粒どもを眺めながら、周囲を見回した。

公園には人影はほんの少しばかり。

砂場で遊んでいるのは子ども達、少し離れた場所に母親らしい数人の主婦がベンチに座って話し込んでいる。

こんな天気でなければもっと人は多いのかもしれない。
お米粒に気がついたわけではないだろうが、ときおり、主婦等が
こちらを見る視線には気がついていた。

目立つか……

サイズの合わぬ革ジャンに、下に着ているのはパジャマ、そして
裸足姿の少女が目立たぬはずがない。

場所を変えようと立ち上がり、ベンチを降りてお米粒を回収して、
公園の入り口まで歩き出す。

ひんやりと、堅い地面を踏みしめる。

背中に向けられた視線を感じるが、振り払うようにそれを無視し
ていた。

入り口で町内の地図があったのでそれを見上げる。

公園、駅、神社。

それを眺めながら、目に付いた神社の位置を確認する。

海鳴神社……

藤見台から駅、病院までの距離を考えれば意外なほどの近さだっ
た。

神社に行くか？

行ってどうになるものでもないが、一夜の寝床くらいは確保でき
るかもしれない。

公園で今の時期を過ごすのは自殺行為に等しい。

曇り始めた空、冷たい風に身を震わせて、自然、足は神社に向か
って歩き出していた。

数分後

赤毛の少女が去った公園に一人の青年と少女がたどり着いていた。聖祥小学校の白い制服のなのはと黒いスーツの若い青年だった。

「いないね、ヴィータちゃん……」

「なのはちゃん、君はいつたん家に帰るんだ」

「え、でも……」

「ヴィータちゃんだっけ、彼女が戻っているかもしれないだろ？」

「うん……戻ってるかな？」

首を少し傾げ、なのはが青年に問いかける。

「もし彼女が家に戻ってて誰もいなかったら寂しいだろ？」

「わかりました。わたし戻ります。仲井さん、後はお願ひします」

ぺこり、と頭を下げて、なのはは高町家のある方に向けて走り出していた。

それを見送った青年はきびすを返して公園を見回す。

それほど大きくもない公園だった。

主婦と子ども達、そこに赤毛の女の子はいない。

どこに行ってしまったのだろう。

彼は携帯を取り出してそれを眺めるがすぐにしまった。

こんなものがなんの役に立つ。

彼女が携帯を持っていれば連絡のつけようもあるのに、と埒もないことを考える。

脳裏に赤毛の少女の顔が思い浮かぶ。

数日前の雨の日、仲井が雨に濡れ、泥水の中に倒れていた女の子を見つけたのは、後輩の天道司のアパートに彼の両親を送った帰りのことだった。

ともすれば視界がほとんどない土砂降りの中で、彼が少女を見つけたことができたのは奇跡的だった。

その少女を見て驚いた。
病院にいた赤毛の少女だった。

何よりも捨て置けなかったのは、彼女が身に着けているものだった。

司の革ジャンに服、そして彼女が病院に残したスニーカーの片割れ。

無関係なはずがない。

冷たく濡れた少女を水の中から抱き起こして、車のシートが濡れるのも構わずに寝かせて車を走らせていた。

司、お前なにやってんだ。

何か厄介ごとにも巻き込まれたのか？

この女の子は誰だ？

家出少女でも拾ったのか？

バカヤロウ、何かあればすぐ相談しろって言っただろうが。

車を走らせながら、このまま自宅に連れ帰るのは問題があることに気がつき思案した。

少し考えてから、携帯を操作して、一番信頼が置ける取引先の一つである翠屋の高町士郎に電話をかけていた。

二つ返事で士郎は連れてきなさいと承諾し、仲井は少女を高町家に預けたのだ。

高町家の人々に面倒を任せ、仲井は帰宅した。

それから数日、天道家の両親に不具合がないか、とか、仕事の卸先を周りながら忙殺されてなかなか見舞いに行く機会をもてなかったが、翠屋で回復に向かっているらしいと訊かされとりあえずは安堵していたのだ。

その矢先、彼女が突然いなくなった。

仲井がそれを訊いたのは、ちょうど翠屋に仕事で立ち寄ったときだった。

高町家の末っ子のなのはちゃんがヴィータちゃんがいなくなった、と母親の桃子さんに抱きついたので。

土郎さんや桃子さんは店から動けない。

だから、俺が探します、と引き受け、仕事を半ば放り出す形なのはちゃんと一緒に彼女を探しに出ていた。

くそ、司、あとで元取り戻すからな、目が覚めたら覚えておけ？

仲井は当てもなく走り出す。

まだ病み上がり、熱も下がっていないという。

こんな寒空に少女一人どこに行くというのだろうか？

焦燥感が身を包む。

何の縁もないはずの女の子。

縁といえば司の服を身に着けていたことだけ。

仕事を放り出してまで一生懸命になる道理などない。

ないはずだが、と彼は自分のそんな性格に苦笑いしていた。

「腹減った……」

ぐう……

容赦なく鳴る腹の音について耐え切れなくなってヴィータは屈み

こんでいた。

路の端の堀の川、流れ溜まりの淵に屈みこんで、水面に映る自分の顔を眺めていた。

背中まである長い赤髪に、日本人とは異なる造形の目鼻立ちは美少女といってもいいだろう。

後数年すればかなり目を引くことであろうが、まだ少女らしいあどけなさの方が強い。

どうにもなれない。

もしこのまま元の体に戻ることができなかつたら？

そんな考えに嫌な汗をかきながら眼を瞑る。

ひもじさに腹が鳴り、少しでも好意に甘えて食べ物を買っておくべきだったと後悔していた。

コンビニに入ろうにも、この格好で入るのは勇気があることだ。

それにこの近所にコンビニなど存在しなかった。

「お米粒……食うか？」

「え！？」

「食つでござるか……」

「我輩、身がいまいちであるがゆえ、米一のが食べがいがあるである」

「ヴィ、ヴィータ様、せ、拙者は不味いであります！」

と米一が叫んで、米二を後ろから押しして差し出す米一。

その二人の肩を後ろからがっちり掴む米三。

三者三様三国志、誰が先に食べられるのか戦々恐々のありさまである。

「裏切り者である！ お助け」

「食つか！ 食べがいねーし……ふう」

額に手を当ててしゃがみこむ。

軽い眩暈に見舞われたのだ。

お米粒が心配そうに見上げていた。

「お体がすぐれんようですな……神気を吸収できればよくなりますぞ」

「あん？」

「ヴィータ様のお体に流れる神気が不足しているのです」

「どういうこと？」

「現界すると、神気の補給が滞りますからな。現世に肉体を持つと神気の補給は自動で行われなくなります。ゆえに神は穢れを被うことでそれを神気に変換して存在を保つのです」

「まじか、初耳だぜ……」

「あの家にいなければ危うい所でしたぞ。わずかですが神気が流れ込んでおりましたからな」

「どうということだ？」

俺は米一に説明を求めた。

直前に言ったことと矛盾するぞ。

「神は神気によって存在を保ち、神気満ち足りれば元気に、不足すれば病気にもなります。ヴィータ様は現世に来てから神気を補給しておりませぬ。熱が出たのは神気の不足ゆえ」

「神気ってのはどうしたら補給できるんだ？ 被うっての以外で」

いまいち被うという意味も理解できていない。

唯一、イメージできたのは神主さんが棒にひらひらの紙がついたのをプラプラ振ってるものだった。

あれもお祓いって言わなかったっけ？

「清らかなる地や神に近い人の側にいると、神気をわずかずつです
が補給できます。あの家にて病気がよくなったのはミカミさまの
おかげ」

「ミカミさまーでござるよ」「ミカミさまのおかげである」

米一の後には米二人がミカミ様と繰り返して、祈りまで捧げている。

「ミカミさまってなんだよ……」

「ミカミさまはミカミさまです」

「わかんねーって……あの家がミカミさまっての？」

俺の問いかけに三人とも首を振る。

よくわからねえが、あそこにいた方がよかった、ということだろ
うか？

しかし戻ろうにも、空腹なせいで路をろくに覚えていなかった。

「まあ、手っ取り早いのがお祓いで地を清めて神気を得ること。今
のヴィータ様はあまり穢れの強くない地をお祓いするのがよかろう
と」

「お祓いって実際何するんだ？」

「いわば浄化の儀式ですな。大地のエネルギーを正常に戻す。地脈
に流れる気を竜脈と呼びましてな、竜脈には吹き溜まりが生じるも
ので、この海鳴の地は絶えずその吹き溜まりが生まれるのです」

「吹き溜まりには人の思いが作用するでござる」

「そこから悪い気を吸収して魔、穢れが生まれるのである」

「へえ……」

「これを」

米一が腕を振ると、白い手帳が現れる。

「かみさま手帳！ お前が持ってたのか」

「お預かりしとりました。ただ使えるのはヴィータ様だけですからの。念じて「開け」とお伝えくだされ」

「ん？ 開け」

と俺は言われるがまま手帳にそう念じると、目の前に立体ホログラムになったコマンドが浮かび上がる。

ステータス、個人情報、兵装、能力、術式、スキル、ヘルプ、注意事項 e t c ……

「おわ……立体映像？」

ステータス部分に触れると、【かみさまポイント：0 / レベル：1】【生命力：158（158） / 神力：24（0）】 e t c …… あれゼロステータスがある。

「神力〇って書いてあるんだが……」

「数日前はマイナスに突入しとりました。マイナスが基本値よりマイナスになると肉体の維持ができなくなります」

「生命力つてのと違うのかよ？」

「生命力は〇になっても死亡するわけではありませんな。一時的に現世での活動能力は失いますが、神力が尽きなければ再起できますぞ」

「重要なのは神気つてわけか……それにしちゃ24が最大値つて少ないか？」

「ステータスはレベルが上がると上がっていきますからな。最大値を上げれば神の格も上がり、ちょっとやそつとでは病気になるてなりませぬ」

「よつは俺は生まれたての神様ってわけか……」

「ですなあ、もっと強くなっていていたただかねば」

「緊急事態である!」

米二が突然叫んで、お米粒達の雰囲気が一瞬で変わる。

「吹き溜まりが発生したである。エネルギー50…60…80…まだ上がるである」

「なんだ、どうなってんだ?」

「吹き溜まりが近くに出現したようござる。米二は穢れを感知する能力をもつてござる。奴の言う数値が100を越えると魔として現界するでござる」

「方角西に740。エネルギー係数124、安定である」

「ヴィータ様、兵装を選んでください。兵装」と念じて、選択した兵装の封印を解いてください

「兵装……」

ホログラフが切り替わる。

俺の武器……浮かび上がるのはグラーフアイゼン、槌矛、ハンマーの形状をした武器だった。

そしてバリアジャケット。

あらかじめ説明書を読んでいたから何となく使い方はわかっていました。

「グラーフアイゼン!」

その名を叫ぶと、俺の目の前にそのハンマーが現れていた。

宙に浮かぶそれを掴むと、ずっしりと、しかし手によく馴染んだ重みが伝わってくる。

持って持って振ってみれば、それは質量感を伴いながらも体の一部のようにフィットしていた。

「ぐずぐずしておれませぬ」「急ぐでござる」「方角あっち、である……」

お米粒達が肩に飛び乗り、俺はお米粒が指し示す方角に向かって走り出す。

体が光に包まれ、着ていた服が溶けるように消えて、体はバリアジャケットに包まれていく。

体を縛る重力から解放されたような開放感、体が一気に軽くなる。

初めての实战。

胸は高鳴っていたが、だが不思議と怖くなかった。

0-9 ヴィータ さまよう(後書き)

アンケート/バリアジャケット

- 1 原作と同じタイプがいい
- 2 神様っぽい和風にしよう

の二つのどちらかを使用しようかな、と。

BJそのものは外見はいくらでも変更可能なので、視覚的な意味でのBJ選択アンケートです。

0-10 ヴィータ 初めての戦い

逢魔が時は移ろう影。

影は夕暮れの斜陽、物影に、遊び去る子ども達の影にそれは潜む。ゆえに人は気がつかない。

自らが影が支配する時間に迷い込んだことを

ここはどこだ？

いつの間にか俺が迷い込んだ路地、歩いてても歩いてても同じところをどういうわけか堂々巡りしていた。

一歩踏み出して恐る恐る振り向けばそこには郵便ポスト。

赤い胴体に刻まれた錆の位置と傷まで把握しているよく知ったポストだった。

おかしい、そんなわけがない。

シャツは汗でぐっしり濡れて、その不快感を誤魔化すように青年はまた歩き出し、また同じ場所に出ていた。

見慣れた十字路、背後には郵便ポスト。

まるで世界が閉じてしまったかのような感覚に暑苦しさを感じてネクタイを緩めていた。

それはよくある都市伝説。

夕方の路地、郵便ポスト、堂々巡りの十字迷路、そこに立ち入って帰った者はいない。

そんな地方の町の怪談話。

帰った者はいないのに、何故そんな話が広がったのか？

彼は誰かが勝手に広めた根も葉もない怪談話だと決め付けていた。

妖怪とかそんな類のものがいるわけがない。

非現実な怪奇現象など、噂にはよく聞いてもこの歳になるまで体験したこともなかった。

植え込まれた常識、当たり前前の日常、簡単に崩れ去る世界。

夕刻の十字路ポストにいと神隠しに遭う　そんな噂話程度の話のはずだった。

人を探していたはずが、迷うはずのない場所で迷い、遭難しているなど常識外れもいいところだ。

携帯　取り出した携帯の受信アンテナはどれも立っていない。

圏外……

空を見上げ、あることに青年は気がつき愕然とする。

空が晴れているはずがない。

今日はさっきまで曇り空で空一面が灰色に包まれていたからだ。

「嘘だろ」

吐き出した言葉は認めたくない事実を認める形となって青年の心を打ち砕いていた。

青年は知らない、彼が迷い込んだのは空間のポケット、一つの境界。

世界が作り出した空間の歪み。

何が原因でそれが生み出されたのか、その謎を人間が解き明かすことは不可能。

何故ならば、それは

ゆらり揺らめき揺らめいて、夕日に翳ったそれは青年の足元から離れて、まるで意志があるかのように蠢いていた。

影が意志を持ち、形を変えていく。

青年が振り向いて、信じられないものを目にしていた。

紅の弾丸の如く緋色の残像を残して、ヴィータは宙を駆け抜ける。踏み抜いた足場は圧縮された空気だ。

跳ぶように空を蹴ってぐんぐん通り過ぎる景色を後に吹き溜まりを視界に収めて、その手前の路地に降り立った。

バリアジャケットの裾、軽い衣擦れの音を立てる緋袴、白と赤のコンストラスト。

肩先を露にし、二の腕を止めた細帯は赤く、そこからゆったりとした振袖が広がって艶やかに揺れていた。

背中に流した長い髪を留めるのは赤いリボンで、余裕を持たせて蝶結びにされている。

巫女服を思わせるバリアジャケットだった。

上を見上げると薄い透明な膜に包まれた、ドーム上の何かが街中の一部を覆っていた。

俺はグラーファイゼンを握り締める。

「あれは結界ですじゃ。吹き溜まりに重なるとは。中に入るのには容易いが、出ることは許さぬ、自然発生型の結界かと」

「どうすればいい？」

自然発生とか突っ込みどころを我慢して俺は米一に訊き返す。

「構わず中に入るのがよろしかろう。結界を解いている暇はない」

「ちとっと参るでござる」

「ここって迷いの十字路じゃねえか？」

「ヴィータ殿、ご存知であるか？」
「まあな……」

入れば決して出れぬ迷いの十字路。
郵便ポストは地獄の入り口、か……

「行くぜ」

そう言いながら俺は結界の中に足を踏み入れていた。
世界が断絶される感覚は神にしか感じ取れないものだった。
結界が見えるのもそうだ。

「郵便ポスト……」

あつた、噂どおりの赤いポスト。
夕暮れの日差しを受けて、より真つ赤に染まっている。
視界が黒いもので煙る。

それは次第に気配を強くして、足元に立ち込めていく。
不愉快な浸食されるかのような感覚に眉をしかめる。
触れた足先が黒く染まって、足袋がブスブスと音を立てていた。

何だこれは？

「穢れ、ですじゃ。我等にとってはこれ以上の毒はないですじゃ。
アイゼンを振るってみてください」

お米粒達は鼻先に手を当てて眼も瞑っている。
なるほどきつそうだ。

気持ち悪いなんてもんじゃない。

存在そのものを食い尽くされるような恐怖感、神にとっての天敵

に違いない。

「こいつか？」

片手のグラーファイゼンを両手に持ち直し、足元に立ち込めた黒煙に向けて振り払う。

すると黒煙はハンマーの先端に吸い寄せられてたちまちの内に消えていた。

そして先端に微量の光が散った。

神気への還元が行われたのだ。

ハンマーを振るった周囲は清浄な空気に変わるが、次から次へと黒煙は生み出されて、まるで生きているかのようにヴィータにまわりつこうと蠢いている。

それをまた振り払い光に換えていく。

こいつらには意志があるかのようだ。

「きりがねえ」

「ここに潜んで、獲物を待ち構えているのである。あの建物から気配を強く感じるである」

米二が指差したのは洋館だった。

今では誰も住んでないことを思わせる家であるが、造りがしっかりしている分、一見すると廃墟に見えなかった。

「隠れるなんて知恵があるのか？」

「魔物は人の意思より生まれます。執着の強い意思であればあるほど、それを撒き散らした人間に近い知恵を得ます。魔物によっては人の形を取るものもいる」

「人間の敵は結局は人間ってわけか。こいつらが人間を襲うとどうなる？」

「取り込んで餌にするか　魔物次第でござる」

「そうそう、彼奴等に人間の慈悲などないである。殺すか喰うか、弄って餌にするか。人間の生命エネルギーが糧であるよ」

「ぐずぐずしてらんねえってことか」

「左様。気配が強くなってきた。もしや人間でも取り込んだのかも
しれませんぞ」

「エネルギー係数221突破である。完全物質化してあの屋敷も喰
らいそうである」

「行くぜ」

俺はアイゼンを強く握りなおし、高い塀を軽々と飛び越えて敷地に侵入する。

窓ガラスはとつくに割れていて、どこからでも入ることができる。建物の室内の向こうの闇が侵入者を飲み込もうと黒煙を吐き出して窓から漏れ出していた。

躊躇っている暇はもうない。

やるか、やられるかだ。

屋敷の窓から踊りこみ、壊れかけた扉をアイゼンで粉碎して廊下に飛び出す。

すでに外の光はわずかばかり、赤い残照を残すのみだ。

突如、高速で飛来した無数の黒き矢弾が前方の廊下から襲い掛かり、逃げ場がないと判断し咄嗟に床に身を投げ出してアイゼンを振るって数発の黒い矢弾を打ち落とすと、ヴィータは飛び込んだきた部屋に身を潜めていた。

一瞬の攻防と、黒い矢を打ち落とした感覚に冷や汗をかいていた。アイゼンを握る手が重く軽く痺れていた。

ハンマーの先の黒い跡が霧散する。

あの矢弾を受けた瞬間、エネルギーを吸い取られるような感覚に

包まれた。

おそらく、神気を吸い取る攻撃に違いない、と俺は判断していた。そう思考して馬鹿な、と思う。

戦いの経験など、天道司という人間は学んだことすらないのだ。肉体的によくスポーツはしていたから引き締まった体つきをしていたものの、激しい格闘技の経験はほとんどない。

せいぜいが護身術程度で、今の動きはこの体の性能であることは間違いないのだが、そんな一瞬での判断と敵の攻撃の性質を理解する能力を持つているはずがないのだ。

いや、そんなことを考えている場合ではない。

ぐずぐずしていれば誰かが犠牲になるかもしれない。

先程の米一の言葉が気になる。

人間でも取り込んだのかもしれないぞ。

させねえ、させてたまるか。

誰も犠牲はださねえ。

強く手の中のグラーファイゼンを握り締めて、廊下の様子を窺い、俺はさつき攻撃がきた方向とは反対の廊下に飛び出していた。

0 - 10 ヴィータ 初めての戦い（後書き）

戦闘二回に分け。

0 - 11 ヴィータ 光の巫女神！

質量を伴った黒矢が床に着弾し、爆風となってヴィータの背後で吹き荒れる。

吹き飛ばされて地に転がるヴィータ。

受身を取って起き上がると、間髪いれずに襲いかかってきた黒い蜘蛛の胴をアイゼンのハンマーがなぎ払っていた。

さらにその陰に潜んでいた蜘蛛が飛び出し、振り切ってゼロ距離に対応しきれないヴィータの上のしかかる体勢になっていた。

牙を剥き出して、不愉快な匂いと黒煙をヴィータの鼻先で撒き散らした。

「くそ、が」

アイゼンを目の前で蜘蛛の顎に噛ませて、両手で持って歯をぎりぎり噛み締める。

アイゼンを奪われまいと力を振り絞るが、マウントポジションを取られ、目の前に迫るあぎとを見れば絶望感が湧いてくる。

ちびっこいものなんて力だ。

複数の脚で肉体を締め付けてくる。

一気にヴィータの頭ごと噛み砕こうと体重をかけて、獰猛な唸り声を発し、蜘蛛はヴィータの鼻先に熱を帯びた黒煙を吐き出す。

「ヴィータ様！ 目をつぶってください。不浄な獣め。オコメフラッシュュ！」

ヴィータの胸元に躍り出た米一の額から閃光が迸り、蜘蛛の眼をつぶしていた。

瞬間、力が弱まりヴィータは全身の力を使って蜘蛛を蹴り飛ばす

と、自由になった両手でアイゼンを握り締め蜘蛛の胴体に振り下ろしていた。

ズドン、と重い手ごたえのある感触が腕に伝わってくる。

壁に衝突しドス黒い色を撒き散らして蜘蛛が消滅する。

その黒い残滓がついたハンマーを振り払うと、強く息を吐きだしていた。

普通の生物ではない、そのことがわかってからアイゼンを振るう力は容赦のないものとなっていたが、何度見ても気持ちがいいものではない。

グラーフアイゼンのハンマーの先に穢れを浄化した光の粒子が弾け飛んでいた。

もう何度目になるかわからない襲撃。

きりがない。

激しい運動に空になった腹が場違いにも音を立てていた。

腹が減って死にそうだ。

すきつ腹を抱えて腹に力を込める。

少しでも空腹から気をそらしてないと倒れてしまいそうだった。

「ち……次から次へよく沸いてきやがる」

「こやつ等は分身のようなもの。本体を倒さねばいくらでも出てくるかと。しかし現界してそれほど経っていないですから。拠点を作られてからでは厄介でしたぞ」

帯襟にしがみついているお米粒達。

米一の台詞に俺は苦い顔をする。

「こんなのが海鳴に普通に沸いて出るのかよ……」

周囲を見回して呟く。

数年間過ごしてきた町が実は魔界同然、不可思議な世界だとは誰も思いはしないだろう。

誰もが知らぬ、気がつかぬ世界。

「ほぼ、吹き溜まりから発生した穢れの対処はその手の専門家がおりますからな。人が気がつかぬうちに処理されます」

「専門家？ 退魔師とかいたりすんのか」

「そうでござる」

ほぼ漫画の知識で本物など見たこともないが、米三に思い切り肯定されて、俺は何だかなあと首を軽く捻る。

「グイータ様、まだ序の口、奴の本体を叩きますぞ」

「へい、へい……」

アイゼンを肩に担いで空返事を返す。

「穢れの濃度が濃くなってきたである。あの階段が怪しいである」

米二の妖怪アンテナ、ではなくセンサーが反応したのか、地下に下る階段を指差していた。

普通、地下ってのはそんな深くないはずだが認識は甘かった。

「この階段どこまであんだよ！」

「こりゃまた長いですな」

見下ろす先は奈落の深淵、何故か底が見えねえ……

建築法違反なんてレベルじゃねえぞ。

「この洋館といい、路地の結界といい、裏に何者が潜んでいますな」
「何者つて？」

「この土地は以前から吹き溜まりが発生しやすいところですから、
何せ龍脈が近い」

「龍脈ねえ……」

難しいことはうだうだ考えてもよくわからねえ。

にしても、わざわざ螺旋階段を用意してる律儀な敵に突っ込みを
入れたくて仕方がねえな。

まあすぐぶっ飛ばしてやるがな。

俺はへの字に口を歪めて笑ってみせると階段を駆け下りていった。

大きな空洞、いつ掘ったのか不明な大穴の底に降り立つと、まるで
削岩機で掘りぬけたような横穴がどこまでも続いている。

不思議なことにはほのかに明るく、壁がまるで胎動するように動い
ていた。

幾分かの気味悪さも目の前の怪物に比べれば些細なものだった。
待ち構えていたのは巨大な一二本脚の蜘蛛、赤い複眼を持った生
物が容赦なく襲い掛かってくる。

普通の蜘蛛じゃねえし、どう見ても今までのとは桁が違う。

「でけえ！」

「ツチグモではないか。何故このようなところに？」

一声、問いたただす隙もなく巨大な脚が振り下ろされる。

見かけによらずスピードは俊速で、糸を吐き出して動きを封じよ
うと、脚での攻撃の後に糸を吐き出していた。

初弾を交わすが、網のように広がった糸に追い詰められる。絡めとられると思った瞬間、身を仰け反らせてなんとかかわす。

「あいや〜」「お助けである」「むじゅ……」

帯ぎりぎりにかわしたはずだがお米粒三人がさらわれていた。地面をごろごろ転がって射程範囲から逃れる。

「お米！」

「構うではありません！」

「あら、逃げたのね？ 上でうろちよろしてた人間？」

女の声、見上げると蜘蛛の頭上に女が一人いた。

黄色く長い乱れ髪に素裸で全身に紋様のような刺青が浮かんでいた。

異様なのは下半身が蜘蛛と合体していることだ。

その手元にはお米粒を捕らえた糸が握られていた。

「な、女？」

「フン、ガキねえ……」

俺の眩きに毒を思わせる妖艶な女が笑った。

どこまでも邪悪さを内包した存在。

「こやつは女郎蜘蛛。アヤカシですよ」

「お黙り」

「むぎゆぎゆ……」

「やめろー！」

お米粒を絞り上げる女、こちらに目を向けて睨みつける。

「あたいの影の獣をよくもやってくれたね。おかげでこっちは力がすつからかんだよ。後でたっぷりその若い男の血肉で咽喉を潤してやるわあ」

若い男？

疑念を発する間もなく女が手を上げてそちらに注意を向ける。

「そういうわけだから邪魔をするんじゃないよ。死ね」
「くっ」

頭上に蜘蛛の影が伸びていた。

たたらを踏んで糸の攻撃をかわし、蜘蛛の背後を取ろうと走り出す。

どこだ、どこか弱点は？

足元に駆け込んで一撃叩き込むのが一番の有効打に思えたが、あの脚攻撃が厄介だった。

懐に入り込んだ瞬間、連続で攻撃されて糸でやられるのが目に見えていた。

あの女がなにをしてくるのかもわからない。

力を使い果たしたようなことを言っていたが真実だとは限らない。俺の行動を躊躇させているのは経験だった。

戦うという経験の圧倒的不足がヴィータの動きを鈍らせる。

ふと、蜘蛛が張り巡らせたであろう、糸を重ね合わせた蜘蛛の巣に人が吊り下げられているのが見えた。

その光景に視線を奪われ、思わず足を止めてしまっていた。
何であんたがここにいるんだ。

仲井……先輩！

先程の女の言葉がよぎる。

餌。

その言葉にぞくりと背筋を震わせた。
こいつが人が消える原因の正体、人をさらって食う魔物。
今まで行方不明になった人々はこのついに食われていた？

「ヴィータ様！」 「ヴィータ殿！」

「やべ」

横からの鉤爪の斬戟、飛び散る鮮血、巨大な脚が振り下ろされ、
ヴィータをその脚で踏みつけていた。

「ガハッ」

「ああん？ よそ見るんじゃないよ」

その衝撃に頭の中が弾けたように真っ白になる。

赤に染まった視界、圧迫された肺から空気が搾り出され、たちまち呼吸難に陥る。

ゼエハア、ヒィ……音だけが咽喉から漏れる。

万力の踏みつけに全身に酷いダメージを受けて、握っていたグラ
ーファイゼンを手放していた。

畜生、ここまでか、ここで俺は終るのか？

何もできないまま？

赤い複眼の蜘蛛が俺を見下ろしていた。

牙の生えた口を開いては閉じて、唾液を落として顔を寄せてくる。喰らおうというのだ。

動け、動け、動きやがれ！

わずかに動いた指先に目を見開く。

まだ終っちゃいねえ！

アイゼン……

小さな手が相棒を求めて掴んでいた。

グラーフアイゼンの消え去りかけた光の灯火が再び力を取り戻したように輝いた。

相棒を手に機会を覗う。

ラテーケンフォルム。

奴に行動を読まれないよう、ぎりぎりまで発動させずに動かない。

「うおおおおっ！ ラテーケンハンマー！！」

弾かれたように起き上がり、体を回転させ、至近距離に迫った蜘蛛の口の中にアイゼンを叩き込む。

変形し、射出される鉄槌の爆撃が蜘蛛の体内で爆ぜて突き抜けた。

「ギヤアアアアアアアアアアア」

獣とも女のものともつかない叫びが空間に木霊して、その巨体を奮わせる。

跳躍し、蜘蛛女の前に着地して、お米粒が絡まった鋼のような硬さの網糸を奪い取っていた。

「き、貴様ー、何者だあ!？」

狂気に満ちた表情で蜘蛛女が叫んだ。

「グイータ」

短くそれだけ告げて女の顔を拳骨で思い切り殴り飛ばすと、轟音を立てて蜘蛛の巨体が土煙を立てて地面に沈んだ。

後は目もくれず先輩の元へ走る。

蜘蛛の巣を払い、釣り下がった糸をお米粒達が断ち切って、落ちた先輩の体を受け止めていた。

「先輩……」

見下ろした、膝の上に乗せたその顔は気絶していて、青白かった。わずかに上下する胸に安心して涙が出ていた。ぼつり、と一滴こぼれて先輩の頬に落ちる。

「まだだあ、まだあ、終っちゃいないよおおお」

張り裂けるような声が響き、空気が張り詰めていく。

女が立ち上がった。

蜘蛛の巨体は消え去っていた。

闇が女の周囲を取り巻いて嵐のように吹き荒れていた。

「殺してやるう。みんなまとめて皆殺しだああ」

狂気を込めて叫び、見る見るうちにその肉体が膨らんでいく。人間の形をしたものが風船のように膨らんでいく様は滑稽でもあった。

「グイータ様、不味いですぞ。彼奴め、この空間に溜め込んだ瘴気を爆発させるつもりじゃあ」

「往生際が悪い……逃げよう」

「逃がさぬわああ」

天井を見上げて女が叫ぶと階段が消失していく。

「くそ、お前、死ぬつもりか」

「キャハハハ、殺してやる！ ミナゴロシイイイ」

マツドな蜘蛛女にもはや理性などなく、こちらの声も届いていない。

駄目でありや、どうにもならねえ。

そうしてる間にもぶくぶくと膨らんだ肉体は元の体積の一〇倍程に膨らんでいた。

もはや人間の形状を保っていなかった。

「お米粒！ どうにかならねえのかよ」

「どうにか、と言われましても……あれは穢れの塊ゆえ、浄化するしか手はありませんが、あれだけの瘴気、殴った程度では浄化しきれませぬ。が」

「が、ってなんだ、がって!?! もったいぶってんじゃねえ!」

「ヴィータ様、拙者の言うとおりにしてください。神降ろしをいたします」

「はい？」

米一が俺の耳に囁く、その言葉を。

「よし、わかったぜ……できなかったら死ぬぞこのやるつ」

「ご武運を」「任せたでござる」「死んでもまたお米に転生するであるよ」

「お米え……気楽なのな」

気が抜けて、肩を落とす。

こっちは後がねえつつうの！

俺は元の姿に戻したグラーファイゼンを構える。

ギガントフォルム

「行くぜ、アイゼン」

『じょうかい
Jawohl』

手の中の鉄槌が巨大なハンマーへと変形していく。

その大きさはヴィータの身長ほどまで巨大化していた。

ハンマーヘッドが角柱状に変化し、魔力の補填を受けて回転し始める。

そして天に掲げ詔を唱え始めると同時に演舞を舞うようにアイゼンを振り回し始める。

閃光によってぼやけた目が治り、ようやく焦点を合わせると、倒れた先輩の元へ一歩踏み出そうとする。

あれ……体、動かねえ？

肉体にかかった負荷の影響か、もう歩けないほど消耗しきっていた。

立っているだけで体の節々がミシミシ悲鳴を上げている。

先輩の体はお米粒達が結界を張って守ってくれた。

もう安心だ。

そう思った瞬間、気が抜けたように膝をついて、スローモーションのように感じながら、地面に倒れ伏していた。

腹……減ったなあ……

最後にそんなことを思っていた。

0 - 11 ヴィータ 光の巫女神！(後書き)

戦闘きついWWW

慣れてないからどうだったかな・・・

なんかアクセスが一気に増えたのでなにかあったかなと。

1 - 1 終わり はじまる関係

事故前 / 事故後

水無^{みずなし}ほとりは今年で大学二年生になる。

海鳴大学に所属し、ツーリング部に所属している。

とはいっても、ほとりが持っているのは原付のスクーターで、ツーリングするにはかっこよさが足りないのが玉に瑕だ。

でもそんなことは関係なく、ほとりはツーリングという男のロマンの香りがするものが好きだった。

走る爽快感は風の中を突き抜けて、まるで自分自身がそうだったかのような開放感が男性的で魅力的だった。

バイトしてお金を貯めているのも原付ではないバイクを買うためだった。

女の子らしいサークル活動も嫌いではないのだが、ほとりにはどうしてもツーリング部に固執する理由があった。

好きな人ができたから

それが第一の利用ですべてだったと言ってもいい。

春は軽井沢で桜を見て。

夏の北海道摩周湖。

秋は京都近辺の山の紅葉巡り。

冬は……

ほとりの秘めた恋心は冬のツリーリングで明かされるはずだった。告白して、付き合ってください。女からこんなこと言うの恥ずかしいけれど、もう待てなかった。

先輩はもてるから、私が知ってるだけで五人はチェックをつけている

焦る、焦る。

だから先輩からデートに誘ってくれたときはとても嬉しかった。もしかしたら雰囲気告白してしまうかもしれない。

いや待て私……もしかして、告白するのが先輩の方かも？

舞い上がっていたのは確かで、メールを貰ったその日はバイトも手がつかなくて桃子さんに叱られちゃった。

桃子さんは私がバイトしてる翠屋のパティシエールなんだけど、それがすごい達人で、外国で修行して一流のお墨付きなの！

旦那さんの高町士郎さんはマスターをして、桃子さんと翠屋を切り盛りしています。

実のところ桃子さんは私の叔母に当たる人で、事故で肉親を亡くした私の面倒をよく見てくれました。

大学に進んだとき、通いと女一人で住むのは物騒と、高町家の部屋を貸してくれたのです。

高町家は藤見台ではそれなりの旧家で部屋も余ってるということなので、最初は遠慮したんだけど、部屋代の代わりにバイトしてほしいと言われて、納得して引越させられました。

その際、水無の家は処分することを決意して、後は専門の人に任せて家を出ました。

本当に後ろ髪引かれる思いだったけど、亡くなった両親と兄さん

との思い出が詰まったこの家を離れて、本当はホッとしていたのか
もしれない。

私には家だけが残り、みんなはいなくなってしまったのだから

そんな過去の傷を、日々の生活の中でようやく忘れた頃に

また事故が私から何もかもを奪い去ってしまった。
今でも耳に残るあの救急車の音を私は覚えている。

海鳴大学所属四年、天道司

警官が告げたその名を信じられない思いで聴いていた。
嘘だ。

そんなはずがない。
先輩が引かれるなんてことがあるはずがない。

だって一昨日は一時間も電話でお話して、その後、メールで日曜
日に一緒に出かけないかって……
それで、それで……

その日は高町家の兄妹達と仲良く朝ごはんを食べてから家を出た。
日曜日のいい天気、午後は雨でしようとか言っていたので折りた
たみ傘を持って出ることにした。

あれよね、相合傘とか、先輩と肩を寄せ合ったりして

化粧を落とさないように気をつけてたから食べるのに時間がかかって少し遅くなった。

お姉さんきれい、って高町家末っ子のなのはちゃんが褒めてくれて、美由紀ちゃんがお姉さん、私にお化粧教えてねって頼まれて、一番上の恭也君がそれをからかって、いつもの家族団らんの風景だった。

遅れることを先輩にメールしたのは駅に着いてからで、内心ドキドキが止まらなかった。

嫌われるかも、という、そんなことで先輩と私の間がどうにかなる関係ではないと知っているけれど、これはデートで、誘われたのは私で、今の私は完璧じゃないといけないんだって自分に言い聞かせていた。

窓際に映る自分の顔を見ながら、ラヴリーに仕上がったチークに片眼を瞑ってみせる。

よしよし、可愛いぞ、と気合を入れる。

唇のグロースの入れは私にしては上出来で、昨日大慌てて買った今日のための上品過ぎず下品すぎない色合いは大人の雰囲気をもかもしだしている。

桃子さんに整えてもらったヘアはいい感じである。

これなら先輩もよそ見る暇などないはず……いやない、ないんだってば！ と自分を説得させていた。

一駅進むたびにその自信はどこかに揺らいで消えてしまったのだけだ。

そして扉が開いて、ほとりは運命の一步を踏み出したのだ。

残酷な現実には救急車のサイレンと赤いランプ、運び出されるタンカ、アスファルトに溜まった血溜まりを突きつける。

そこから先はすべてが灰色に変わった。

何も見えない、何も聞こえない、何も理解できない。

当てもなく歩き出し、気がついたとき、私は雨に濡れて歩道に立ち尽くしていた。

すれ違う人々の視線など気にも留めなかった。

シヨウウィンドウにずぶ濡れになった女が映り、それが私だと気がつく。

冷たい雨に打たれ、もう化粧なんて意味を持たなかった。

どうやって帰宅したのかさえあやふやだった。

濡れ鼠の私をなのはちゃんが玄関で見つけて、美由紀ちゃんに無理矢理お風呂に入れられた気がする。

ろくすっぽまともな返事ができないまま、されるがままにされていた。

何があったのか訊かれなかった。

訊かれても何も答えられなかつと思う。

そして暗い部屋に籠って現実から目をそむけるように布団をかぶっていた。

携帯は怖くて電源を切っていた。

傷つくのが怖くて何もかもから目を閉じていた。

ひとり・フェードアウト

現実の朝は空腹と無縁ではいられない。

しんと冷え込む朝、布団の中の温もりは至上のもので、毛布に包まってその柔らかな世界に浸りきる。

そんな至上さえも抵抗できないのが味噌汁の匂いとベーコンエッグを焼く匂いだった。

グイータの鋭敏なる嗅覚は一瞬でそれを捉え、目覚めという不快

感さえ通り抜けて、本能を満たす食欲のままに起き出していた。

「うあ、さぶ……」

寝癖のあほ毛がピヨコンと飛び出して、着ているのはでかいだぶだぶのシャツだった。

下に何も履いてなくてスースーする。

くんくんと犬のように室内を嗅ぐと、味噌汁の匂いにグーっとなつたお腹の欲求には勝てず、素足のままりビングに出ている。

大きな背中が見える。

その人物の背中俺がよく知る人物だった。

気配に気がついて振り向いた。

「よ、起きたか。日本語わかるか？」

その問いかけに頷いてみせると、よし、と言ってベーコンエッグをテーブルの上の皿に盛り付けている。

仲井吾郎　それがこの青年の名前で、天道司の先輩に当たる人物である。

「えつと……」

「そっち座りな、腹減つただろ」

「はい……」

躊躇いながら、テーブルに近寄り、見上げる形で先輩を眺めていた。

「ん、どした？」

促されてテーブルの椅子を引く。
等身の低さに家具を扱うのにも勝手が違う。

「んじゃ、いただきます」

「……いただきます」

フォークと箸が並べてあって俺は箸を取ってベーコンエッグを口に入れていた。

胃がびっくりしないようにゆっくり噛んで、ご飯も頬張っていた。卵にベーコン、塩胡椒のシンプルな味付けはそれだけで胃を刺激していた。

最初の一口からすぐに次の一口となり、味噌汁を啜り、またご飯を頬張る。

美味い。

普通の朝食に過ぎない、そのはずが、涙が出るほど美味かった。この体になってから初めての食事だった。

「よっぽで腹へってたんだな。ゆっくり噛めよ」

その言葉に頷きながら俺は味噌汁を飲み干す。

「お代わりしろよ」

そういう先輩の大きな手がお椀を持って鍋から味噌汁を注いで置いた。

ようやく腹も満たし落ち着いた頃、自分が何故ここにいるのか、ようやく疑問が沸いていた。

俺はあの後どうなったんだ？
化け物ぶっ倒したのは覚えてるがその後の記憶はない。

「えーとだな……ちと訊きたいことがあるんだが」
「はい」

身構えて返事を返す。

今の俺が何者なのか、天道司であることを話すことは難しい。
かといって身の証を立てられるものはない。
先輩は椅子を反転させて座り込む。

「ずばり君は家出少女だったりして、司に拾われて一緒に暮らしてたりしたのかなっ？」

「はい？」

「事情はあると思うが……君、病院にいただろ。訊いたよ、ずっと治療室の前から動かなかったって。それに司の服を着てた。あそこに居合わせ、当人の服を着た女の子。無関係ではないわな。うーんと、俺の推論間違ってるのかな？」

そういつて頭をポリポリとかいた先輩を俺はポカンと眺めていた。
家出少女……拾った？

その言葉にドキリとした胸を撫で下ろす気分だった。
そういう認識をされていたのか……
間違っている、間違っているが、真実よりはよほど真実に思える内容だった。

しかし家出少女だと認めればどうなる？
間違いなく警察の世話になる。

そして不法入国者という扱いになるだろう。
ただし、どの国にも所属が確認できない少女の行き場はどうなる
のだろうか？

よくてどこかの施設に入れられることになるだろう。
それは駄目だ。

脱走すれば、自由な行動など不可能になる。
いくら神がどうだろうが、日本という国の現実には異分子の存在を
許さないだろう。

思考に沈んで黙ってしまったヴィータをじっと仲井は見つめてい
た。

本人にとって答え難いことだろう。

素性はわからない。

病院から逃げ出し、再び出会ったとき少女は雨の中、泥水に沈み
こむように倒れていた。

おそらく、司のアパートに寄ったのだろうと推測する。

アパートには天道家の夫婦がいて立ち入ることはできなかったの
だろう。

そして高町家からは意識が戻ってすぐに姿をくらました。

こんな小さな少女が人を避けて生きねばならない人生とはどのよ
うなものなのだろうか？

平和な日常に生きる者からすれば壮絶の一言である。

見た目は八歳くらいであるにもかかわらず、この子はどんな道を
歩んできたのだろうか？

司、お前はどんな思いでこの子を見ていたんだ？

仲井は天道司という男が戯れに少女を引き入れるような男ではな
いことを知っている。

バイクが好きで、仲井もバイクが好きだった。

大学時代は一緒に何度も旅をした。

語らい酒を飲み、将来の消えかけた夢を追ってみたり、たまにバカを試してみたり、恋とは何なのかを語ったりもした。

だからこそ言えることがある。

司がこの子の信頼を勝ち得たのは、たった一つのことから始めたからじゃないだろうか？

だから、俺もそこから始めてみようと思う

「俺の名前は仲井吾郎、君の名前を覚えてくれないか？」

友達にならないか？

そこから二人の関係は始まった。

1 - 2 退魔師 その男 危険につき!?

俺が先輩のところによっかいになるに当たって、いくつかの約束事をさせられた。

一つ、外出するときは必ず行き先を告げるかメモを残すこと。
二つ、知らない人には二人の関係はいとこであることを告げること。
と。

三つ、携帯を持ち歩くこと。

まあ当然だが、居候させてもらうのだから行き先はちゃんと教えることには同意した。

神様のところに行くとかはさすがに書けないが、神社巡りをすることは言っておいた。

何故かと訊かれたので神社巡りが趣味なのだと答えたが、女の子の趣味にしては渋いと言われた。

俺もそう思う。

何故いとこなのか不明だったが、先輩の義理の姉がイタリアにいるらしく、俺は義姉の娘という立ち位置らしい。

連絡などされればアウトだが、身元引受人は先輩と高町士郎という人が引き受けてくれるらしい。

それと今まで思い出さなかったのが不思議なくらいだが、先輩と高町家、その高町家が経営する喫茶店、翠屋との関係。

大学の後輩である水無ほとりが下宿しているのが同じ家名であり、そこでバイトしていることも思い出していた。

そして住所は藤見台であるから、偶然の一致を不思議がるより、気がつかない方がおかしいのだ。

高町家の話をたまに彼女がするのを訊いてはいたのだが、実際にはほとんど聞き流していたようで、高町家 翠屋が結びついていなかった。

何となく家族構成はぼんやりと覚えていた。

ではあのおとき看病してくれたのは彼女なのかもしれない。

聞き覚えがあると思ったあの声がそうなのだろう。

後、なのはという印象的な少女のことも思い出す。

何せ熱に浮かされていたときは他の家人の顔を見ることさえなかったのだ。

思わずため息をつく。

何から何まで天道司という男は人に迷惑を掛け捲るのが性らしい。体は変わってもそういうところだけは変わらない。

この不義理はどうやって返せるものか考えてもわからなかった。

立ち鏡に映る今の俺は赤毛の少女で、身長は小学三年生ほど。

長い髪はどう扱ったらいいものかわからなかったから、縛るためのゴムを貰ってポニーテールにしていた。

着ている服は先輩が高町家から借り受けてきたもので、トレーナーとジーンズだった。

ヴィータの体には少し大きく、高町家の長男のお古らしく、名前は高町恭也と言って、来年から大学生だという。

どうも後輩になるようだが、あつて話をする機会が得られるかはまだわからない。

わからないというのは天道司としてだった。

パジャマはそのまま借り受けて、今は洗濯されて折りたたんで置いてある。

ただ居候もあれなので、家事は一切ではないがある程度を手伝うことを約束していた。

今は大量の洗濯物を取り込んで薄い日差しを浴びながら下着肌着を選別して畳んでいる。

何せ男の一人暮らし、洗濯物を溜め込んで後で一気に洗うやり方である。

司にも経験がある、というか、先輩より実は酷い。

洗濯に関してはかなりルーズであったので、今こつやつて洗濯物をきれいに畳んでいるのは何やらむず痒くなる。

さらにアイロンまで気合を入れて用意した。

せめてYシャツなど、お世話になる意味も込めてきちんとしたかったこともある。

何やらそんな作業をしている自分に、亭主の服を仕付ける妻のようだなと想像して、少し精神的なダメージを追っていた。

いや、ないし幼妻にもほどがありすぎる。

鏡の中の俺は何となく眺めてても可愛らしい美少女だった。

自分でそう思ってしまったのは男の性なのだろうか？

決して自意識過剰でないことは男の目で観てそう思ったのだから間違いはない。

可愛い女の子の自分が男の服を妻のようにアイロン掛けをしているのだ。

次の瞬間、俺は洗濯物に身を投げて身悶えていた。

やばい……早く、元の体に戻りたい。

『散歩しに行きます（神社巡りをかねて……）。七時くらいまでには帰ります』

テーブルの上に書き置きを残し、俺はジャンバーを羽織る。

このジャンバーも借りたもので、革ジャンはでかすぎるので、ハンガーにかけてしまわれていた。

この時間くらいに先輩も戻るとは思ったが、実際にはもっと遅くなることも知っていた。

そのときは多分携帯で連絡すればいい。

先輩から渡された携帯は予備のもので、旧式のものだった。

買い換えると前々から言っていたが、まだ解約を済ませていなくつたらしく、それが幸いヴィータに持てと渡してきたのだ。

高町家には後日、色々な意味を込めてのお礼を言い行くことになっていた。

彼女や高町家の人々にどんな顔をすればいいのかわからなかったが、けじめはつけなければならぬ。

次の土曜日にお邪魔することになっていた。

それよりも気になるのが俺の体のことだ。

病院に行きたかったが、行けば両親に鉢合わせする可能性が高いかといつて先輩に病院に行くとは言い出しにくかったものの、高町家に寄った後に事故に遭った後輩を見舞いに行くからな、と俺の頭を撫でて言うので、そのときまで我慢することにした。

今は神様としての仕事をしてしまおうと手始めに神社巡りをすることにしたのだ。

お米粒どもは家で留守番してると言うと、じゃんけんで勝った米二がついてきた。

こいつの妖怪センサーは役立つのでちょうどよかったとも言える。

先輩が買って来てくれた新品のスニーカーに足を通して玄関から表に繰り出していた。

空はどこまでも青くて、俺は街中の午後の空気を嗅いで地図片手

に散策を開始するのだった。

翠屋

「いらつしやいませー」

翠屋はお菓子屋であり喫茶店でもある。

店内に凜とした声が響いて客を出迎える。

ウェイトレスのほとりがその客さんを見たのは初めてのことだった。

翠屋はこの近所では隠れた名店として知られており、常に一定数以上のお客さんが入る。

常連も多いが、新規の客も訪れては思いもよらぬお菓子の味に満足してまた来店するのだ。

そんなりピーターの口伝えもあって翠屋は繁盛していた。

その多くが主婦層であつたりするので、大概のお客さんの顔は覚えてしまうのだが、そのお客さんは今までの客層からはずいぶんと印象が異なりほとりの記憶に残った。

「珈琲を頼む」

「かしこまりました」

深い声が注文し、慌ててほとりがオーダーを受ける。

外見的にまだ三〇代かと思つたが五〇代を思わせる渋い声、紳士帽に黒いコートと出で立ちに可笑しな点は見当たらなかったが、どこか異様な雰囲気を受けていた。

「マスター、珈琲一つです」

「はいよ、ほとりちゃん」

「はい？」

ほとりは士郎の方に振り向く。

「あのお客さんには私から持つていくから」

「あ、はい……お知り合いなんですか？」

「いや、そうじゃないけど。ご挨拶しようと思ってね」

ほとりは不思議に思いながら頷く。

知人ではないが挨拶をするという。

異様とは感じてても偉い人という印象ではない。

珈琲を淹れてそれを運ぶ士郎の背中を眺める。

席は端の方なので位置は遠い。

「すみません、お会計お願いします」

「はい」

ほとりがレジにつくと、カランコロンと音を立て、店内に大学生のグループが入ってきて、何人かの女学生がほとりに手を振った。

同じ大学の人達だった。

レジを打ちお釣りを渡して、次の注文を受けに動く、忙しさに忙殺されていた。

そのせいか、あの不思議なお客さんのことはすっかり忘れ果てていたのだ。

店内で一杯の珈琲で粘る客は珍しくもないから、注意さえ払うこともなかった。

「ほとりちゃん、お疲れ様。今日はもう上がっていいわよ」

「はい」

奥で作業していた桃子さんにバトンタッチして、ほとりはその日のバイトを上がっていた。

とある神社

とんとん、ぺた。

赤い朱印のインクを絵馬に押し付けて、しっかり押せたかとそれを見る。

うん、まあ、これならOKか？

「よい、お見事である！」

米二が偉そうに胸を張ってみせる。

「これってどうすんだよ？ 押した上にまた押してくのか？」

「まあ、よく見るである。ペケならすぐに消え、合格なら沈み込むである」

「あん？」

絵馬を見ると、インクがにじみ出てるのかと思ったが、押した上に映像となって浮き出たかと思ったら、赤い光を帯びて絵馬の中に沈みこんでいく。

「これで通行証にこの門が記憶されたである」
「へえ……」

絵馬を裏返すとこの神社の名が記されていた。

これで三つで、空きはずいぶんあった。

「全部でいくつあるんだ？」

「我輩の記憶によると三八箇所である」

「三八……多いなおい」

「海鳴は由緒正しき神が集う地である。むしろ門として使える社がこの数は少ないと言えるのである」

「そーなのか？」

俺は絵馬をクルクル回しながら、スタンプ置き場の戸口に背中を預ける。

「なあ、あのさ」

「なんであるか？」

「もしかしてここってさあ、俺等みたいな沢山いる？ 神様とか、妖怪も普通に街中にいるのか？」

「カッカカ」

判を押す台座の上でお米粒が笑う。

「変に笑うなよ」

「元より八百万の神がおわす国である。神の地を離れるものもおりますしな。はぐれ神もたまーに来るである。人が多い地ほどアヤカシの類も増えるであるな」

「こないだのツチグモだっけ、あんなのが都会には山ほどいるってことか？」

「大概は姿を隠し人の社会に紛れてるである。人を喰らって力を得たアヤカシは悪目立ちする分、その手のものを退治する輩に狙われるのである」

「退魔師？」

「である」

お米粒は首をすくめて見せる。

その様子から、彼らと神様が別に仲がよいわけでもないのかと推測していた。

「退治されるのは悪いことをした、人間社会に害を与えるものって認識でいいのか？」

「おおむねその通り、であるが、所詮は人の技。彼奴等は見境なくアヤカシを滅ぼしてしまう。浄化するのではない、滅殺してしまうところが違うのである」

「どこが違う？」

「我等神の源は神気。アヤカシは穢れを好むである。正反対とはいえ、この二つは龍脈より生み出されし力。その力は循環して世界を保つエネルギーになるのである。その流れはある一定のバランスを保ちながら存在するのである」

「ふむふむ？」

「退魔の力は強い力を持つである。人が編み出した技は陰陽を操るである。それは神とアヤカシをも滅ぼす力ともなるのである。もともと強き神、海鳴様ほどであれば人に容易く滅ぼされなどされぬである」

「それでも力の弱い神なら滅ぼせるってことか？」

「今の世界は人間の世界。昔は神が堂々と神と人が暮らしていた時代があったのである。それが今のような世の中になったのは龍脈の変化が作用してるである」

「どういうことだよ？ 昔と今が違うのが龍脈が関係あるとして、退魔師がそんな世界に変えたわけでもないだろう？」

「ごく一部の世間から秘匿されているであろう退魔師がいるからといって、世界が変わった理由が退魔師にあると考えるのは不自然な

ことだ。

「その通りである。個人でしかない退魔師がいくら群れてもたいしたことがないである。しかし国が総力を持って巨悪のアヤカシを封じることが過去にあったとすればどう考えるであるか？」

「そんな、とんでもない怪物がいたってことか？」

俺は腕を組み、胡乱そうにお米粒を睨む。

頭の中には巨大なメカゴジラが火を噴いていた。

「そう、国がそやつのせいであつて真つ二つ、いや瓦解寸前にまで追い込まれれば人も団結するものである」

「なんか有名な話っぽいな？ 神話の時代の話なんかか……どしたよ？」

米二の妖怪アンテナ、ならぬ髪が立ってクルクル周っていた。

警戒して周囲を見回すが、参拝に訪れている数人の客しか見当たらない。

「おい、米二……！？」

ぞくりと何かが背中を駆け抜けていく。

ヤバイ、何かヤバイという感覚に全身が緊張していた。

人の身であれば決して感じ取れぬ気の流れに冷や汗が吹いて出そうだった。

階段下　そいつは上がってくる。

黒いコートに黒い帽子、痩せた体に鋭い眼光。

燃え立つように冷たい気を撒き散らす異形の気をまとった男。

ヴィータは動けない。

その殺気は隠しても隠し切れない威圧感を放ちながら世界を冷たく浸食していた。

人間、なのか？

境内の石畳、男はヴィータの手前十歩の位置で立ち止まった。

鷹のように鋭い視線が向けられ、最初にお米粒、そしてヴィータへと向けられていた。

お米粒は凍りついたかのようにコロんと台座の上から滑り落ちる。

「これは珍しい　ずいぶんと可愛らしい神がいたものだ」

その言葉が刃のように鋭くヴィータの心臓を打ち抜いていた。

確かな衝撃を感じて、無意識に胸に手を当てていた。

心臓は動いている、いるが……そこは早鐘を打つようにドクンドクンと波打って心を乱す。

息をすることさえ苦しい、その圧迫感、男がまとう気そのものだった。

密やかに男が笑う。

「お初にお目にかかる。退魔師、真霧灯依まきづとういという。お見知りおきい
ただこう」

帽子を脱いで、胸に手を当てて男が名乗っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3668y/>

俺が事故って起きたら紅の鉄槌少女（ヴィータ）になっていた【ネタ】

2011年11月24日04時13分発行